

上　沢　遺　跡

第55次調査

発掘調査報告書

2009

神戸市教育委員会



SD301出土遺物

巻頭写真図版2



SD307出土遺物



ST 101出土遺物

序

上沢遺跡は神戸市兵庫区上沢通8丁目・長田区五番町1丁目を中心に広がる縄文時代から中世に及ぶ複合遺跡です。

今回報告します第55次調査は、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

調査の結果、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての溝が見つかり、大量の土器が出土するなど、貴重な資料が発見されました。

この調査報告がこの地域に暮らしていた先人の足跡を明らかにすることで、地域の文化財保護や普及の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社アーバネックスをはじめ、調査にご協力いただきました方々、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成21年2月

神戸市教育委員会

教育長 橋口秀志

例　言

1. 本書は神戸市兵庫区上沢通8丁目102-4に所在する上沢遺跡第55次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、神戸市教育委員会が株式会社アーバネックスから委託を受けて、現地調査を平成20年1月7日～3月26日まで実施した。調査対象面積は500m²である。また、出土遺物の整理業務については、平成20年度に委託を受けて、神戸市埋蔵文化財センターで実施している。
3. 現地での調査は富山直人が担当し、本書の作成は中村大介の協力を得て、小林さやかが担当した。本文はII. の金属製品・有機質遺物、II. 5 生産関連遺物については中村、それ以外の部分は小林が記述した。
4. 現地での造構等の撮影は富山が行い、出土遺物の撮影は埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。
5. III. 出土木製品の樹種同定調査については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
6. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「夢野」「長田」を使用した。
7. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示している。
8. 今回の調査で出土した遺物及び図面等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議会の指導の下、以下の組織で実施された。
神戸市文化財保護審議委員（史跡・考古担当）
　横上重光　前神戸女子短期大学教授（～平成19年7月14日）
　工樂善通　大阪府狹山池博物館館長
　和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局		埋蔵文化財調査係長	千種浩
教育長	小川雄三（平成19年度）	文化財課主査	丹治康明
	橋口秀志（平成20年度）	文化財課主査	安田滋
社会教育部長	黒住章久	文化財課主査	山本雅和（平成19年度）
教育委員会参事	柏木一孝	事務担当学芸員	阿部敬生 中谷正
（文化財課長事務取扱）		調査担当学芸員	富山直人
社会教育部主幹	丸山潔	遺物整理担当学芸員	黒田恭正 佐伯二郎
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）		報告書作成担当学芸員	小林さやか
社会教育部主幹	渡辺伸行	保存科学担当学芸員	中村大介
（埋蔵文化財センター所長事務取扱）			

目 次

I.はじめ	1	(3) ピット	24
1. 上沢遺跡の立地と歴史的環境	1	(4) 遺構に伴わない遺物	24
(1) 遺跡の立地	1	3. 第2遺構面	26
(2) 周辺の遺跡	2	(1) 土坑	26
2. これまでの調査成果	4	(2) ピット	26
3. 調査に至る経緯と経過	8	(3) 遺構に伴わない遺物	28
(1) 調査に至る経緯	8	4. 第1遺構面	31
(2) 発掘調査の経過	8	(1) 溝・流路	31
II. 遺構と遺物	11	(2) 井戸・土坑	32
1. 調査の概要	11	(3) 木棺墓	33
(1) 調査の方法	11	(4) 遺構に伴わない遺物	35
(2) 基本層序	11	5. 生産関連遺物	36
2. 第3遺構面	12	III. 出土木製品の樹種同定調査	41
(1) 溝	12	IV.まとめ	44
(2) 土坑	23		

挿図目次

fig.1 上沢遺跡の位置	1	fig.29 第2遺構面の遺構	26
fig.2 上沢遺跡と周辺の遺跡 ($S=1/25,000$)	3	fig.30 SK202 平面・断面図 出土遺物	27
fig.3 上沢遺跡調査地点 ($S=1/2,500$)	5	fig.31 ピット出土遺物 (1)	27
fig.4 作業風景	8	fig.32 ピット出土遺物 (2)	28
fig.5 調査区地区割図	9	fig.33 遺構に伴わない遺物 (1)	28
fig.6 土層断面図	11	fig.34 遺構に伴わない遺物 (2)	29
fig.7 第3遺構面の遺構	12	fig.35 遺構に伴わない遺物 (3)	29
fig.8 SD301 平面・断面図	13	fig.36 遺構に伴わない遺物 (4)	30
fig.9 SD301 出土遺物 (1)	14	fig.37 遺構に伴わない遺物 (5)	30
fig.10 SD301 出土遺物 (2)	15	fig.38 第1遺構面の遺構	31
fig.11 SD301 出土遺物 (3)	17	fig.39 SD101 断面図	32
fig.12 SD301 出土遺物 (4)	18	fig.40 SD101・SR101 出土遺物	32
fig.13 SD301 出土遺物 (5)	19	fig.41 SR101 断面図	32
fig.14 SD301 出土遺物 (6)	20	fig.42 SF101 平面・断面図	33
fig.15 SD302 断面図	20	fig.43 SK101 平面・断面図	33
fig.16 SD303・304 断面図	20	fig.44 SK111 平面・断面図	33
fig.17 SD302 出土遺物	20	fig.45 土坑出土遺物	33
fig.18 SD304・306・307 出土遺物	21	fig.46 ST101 平面・断面・立面図	34
fig.19 SD306 平面・断面図	22	fig.47 ST101 出土遺物	35
fig.20 SD307 平面・断面図	22	fig.48 遺構に伴わない遺物 (1)	35
fig.21 SK304 平面・断面図	23	fig.49 遺構に伴わない遺物 (2)	35
fig.22 土坑出土遺物	23	fig.50 金属組織顕微鏡写真 (1)	37
fig.23 SK304 出土遺物	23	fig.51 金属組織顕微鏡写真 (2)	37
fig.24 ピット出土遺物	24	fig.52 生産関連遺物	38
fig.25 SP3174 出土遺物	24	fig.53 生産関連遺物写真	40
fig.26 SP3103 出土遺物	25	fig.54 同上X線透過画像	40
fig.27 遺構に伴わない遺物 (1)	25	fig.55 山土木材組織の光学顕微鏡写真	43
fig.28 遺構に伴わない遺物 (2)	25	fig.56 庄内期の主な遺構	45

表 目 次

表 1. 上沢遺跡調査一覧 (1)	6	表 4. 出土木製品の樹種同定結果	41
表 2. 上沢遺跡調査一覧 (2)	7	表 5. 出土木製品樹種同定結果一覧	42
表 3. 生産関連遺物計測表	38		

卷頭写真図版目次

卷頭写真図版 1	SD301 出土遺物
卷頭写真図版 2	SD307 出土遺物
	ST101 出土遺物

写真図版目次

図版 1 第3遺構面全景 (東から)	図版18 SD307出土遺物(2)
第3遺構面全景 (北から)	SK304出土遺物
図版 2 SD301遺物出土状況 (北から)	SK306出土遺物
SD306遺物出土状況 (北から)	SP317出土遺物
SD301・SD310 (東から)	図版19 第3遺構面 遺構に伴わない遺物
図版 3 第2遺構面全景 (東から)	図版20 SK202出土遺物
第1遺構面全景 (南から)	SP2105出土遺物
図版 4 ST101遺物出土状況 (東から)	SP2325出土遺物
ST101植底状況 (北から)	SP219出土遺物
図版 5 SD301出土遺物 (1)	SP3103・SP265・SP220出土柱材
図版 6 SD301出土遺物 (2)	第2遺構面 遺構に伴わない遺物(1)
図版 7 SD301出土遺物 (3)	第2遺構面 遺構に伴わない遺物(2)
図版 8 SD301出土遺物 (4)	図版21 第2遺構面 遺構に伴わない遺物(3)
図版 9 SD301出土遺物 (5)	図版22 ST101出土遺物
図版10 SD301出土遺物 (6)	図版23 SD101出土遺物
図版11 SD301出土遺物 (7)	SR101出土遺物
図版12 SD301出土遺物 (8)	SK101出土遺物
図版13 SD301出土遺物 (9)	SK111出土遺物
図版14 SD301出土遺物 (10)	第1遺構面 遺構に伴わない遺物
図版15 SD301出土遺物 (11)	SP257・SD302出土動植物遺存体
図版16 SD301出土遺物 (12)	図版25 金属製品
図版17 SD302出土遺物	同上X線透過画像
SD304出土遺物	
SD306出土遺物	
SD307出土遺物(1)	

I. はじめに

1. 上沢遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

上沢遺跡は、六甲山南麓の会下山から続く小丘陵の裾部に形成された標高約9～16mの扇状地に立地している。東は神戸市兵庫区上沢通7丁目から、西は長田区五番町3丁目までの東西500m、南北350mの東西に長く広がる。現在は山手幹線道路沿いの市街地となっているが、明治18年測量の仮説地形図によると、かつては耕作地であったことがわかる。

六甲山南麓は南北に急激な高低差のある地形であるため、小河川が多く、主にその小河川によって形成された扇状地上に遺跡が存在する。上沢遺跡の東にはこれまでたびたび氾濫をくりかえしてきた旧淡川が南に向かって流れていったが、新淡川（旧苅藻川）へと付け替えの隧道を掘削し、現在は上沢遺跡の北側を西方向へ流れる。現状では上沢通8丁目南西の交差点付近を境に東西に下る地形となっている。

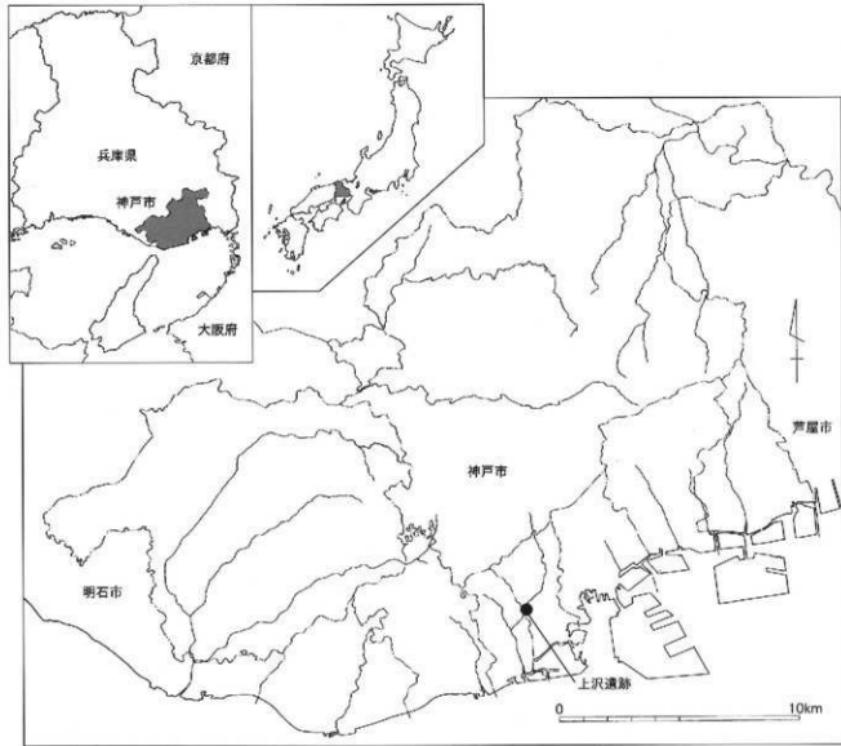


fig.1 上沢遺跡の位置

(2) 周辺の遺跡

- 旧石器時代** 発掘調査で発見された例ではないが、会下山遺跡においてナイフ形石器が採集されており、この付近で人間の活動が行われていたことを示す最古の例となっている。
- 縄文時代** 宇治川南遺跡・雲井遺跡において早期の押型文土器が出土しており、宇治川南遺跡は晚期まで継続して土器が出土している。
後期は楠・荒田町遺跡で土坑が確認されている他、近年、生田遺跡において土坑や土器溝よりから多量の元住吉山II式・宮滝式の土器が出土している。
晩期には五番町遺跡・戎町遺跡で構築・遺物が見つかっている。晩期末の突帯文土器が出土する時期になると、上沢遺跡をはじめ、大開遺跡・長田神社境内遺跡等遺跡数が増加し、弥生時代前期に継続していく。
- 弥生時代** 大開遺跡においては前期に環濠集落がつくられ、多数の竪穴住居・貯蔵穴等が見つかっている。また、戎町遺跡では前期後半からの竪穴住居・土坑墓・水田が見つかっており、多数の遺物が出土すること等から、拠点集落と考えられている。
楠・荒田町遺跡では前期末～中期初頭の多数の貯蔵穴が見つかっており、中期の大型掘立柱建物も確認されている。また、中期後半の方形周溝墓も見つかっており、搬入された土器等を多く出土することからも、戎町遺跡同様、拠点集落と考えられている。
後期以降、集落数は飛躍的に増加し、長田神社境内遺跡・兵庫松本遺跡・戎町遺跡で竪穴住居等が見つかっている。また、御蔵遺跡では同時期の水田が見つかっている。
- 古墳時代** 古墳時代前期初頭は弥生時代後期末以降からの遺跡が継続している。前期後半には会下山二木松古墳が造られた。
中期に入ると、松野遺跡では豪族居館と考えられる柵列に囲まれた掘立柱建物群が見つかっている他、滑石製品が大量に出土する祭祀的な遺構も確認されている。神楽遺跡と上沢遺跡からは韓式土器が多数出土している。前期末から中期初頭の古墳としては、新渋川河口付近に造られた念仏山古墳があげられる。
- 水等遺跡では近年、後期の掘立柱建物が數棟並んで見つかっている。また、生田遺跡や楠・荒田町遺跡等で竪穴住居等が見つかっている。
- 飛鳥・奈良時代** 上沢遺跡に近接する室内遺跡は礎石・瓦・埴像の破片が出土していることから、伝房王寺跡と考えられているが、いまだ明確な造構は見つかっていない。御蔵遺跡ではこの時期の掘立柱建物・井戸等が見つかっており、また、帶金具・墨書き土器等が出土していることから、上沢遺跡と同様、官衙的様相をもつ遺跡といえる。
- 平安時代** 福原京関連遺跡と考えられる楠・荒田町遺跡では、二重の溝・大型の掘立柱建物が確認されている。祇園遺跡では同時期の圓池遺構が見つかっており、多量の土器が出土していることから、貴族の邸宅と考えられている。
- 中世以降** 二葉町遺跡は阪神・淡路大震災後の再開発事業に伴い広範囲に調査を実施しているため、掘立柱建物・井戸・墓等が多数見つかっており、この時期の集落の様子がよくわかる遺跡となっている。中世後半の花隈城跡では最近の調査で焼けた瓦が大量に見つかっており、今までよく判っていなかった花隈城の様子を知る手がかりと期待される。兵庫津遺跡では中世後半から連綿と続く町屋が見つかっており、当時の暮らしが明らかになりつつある。

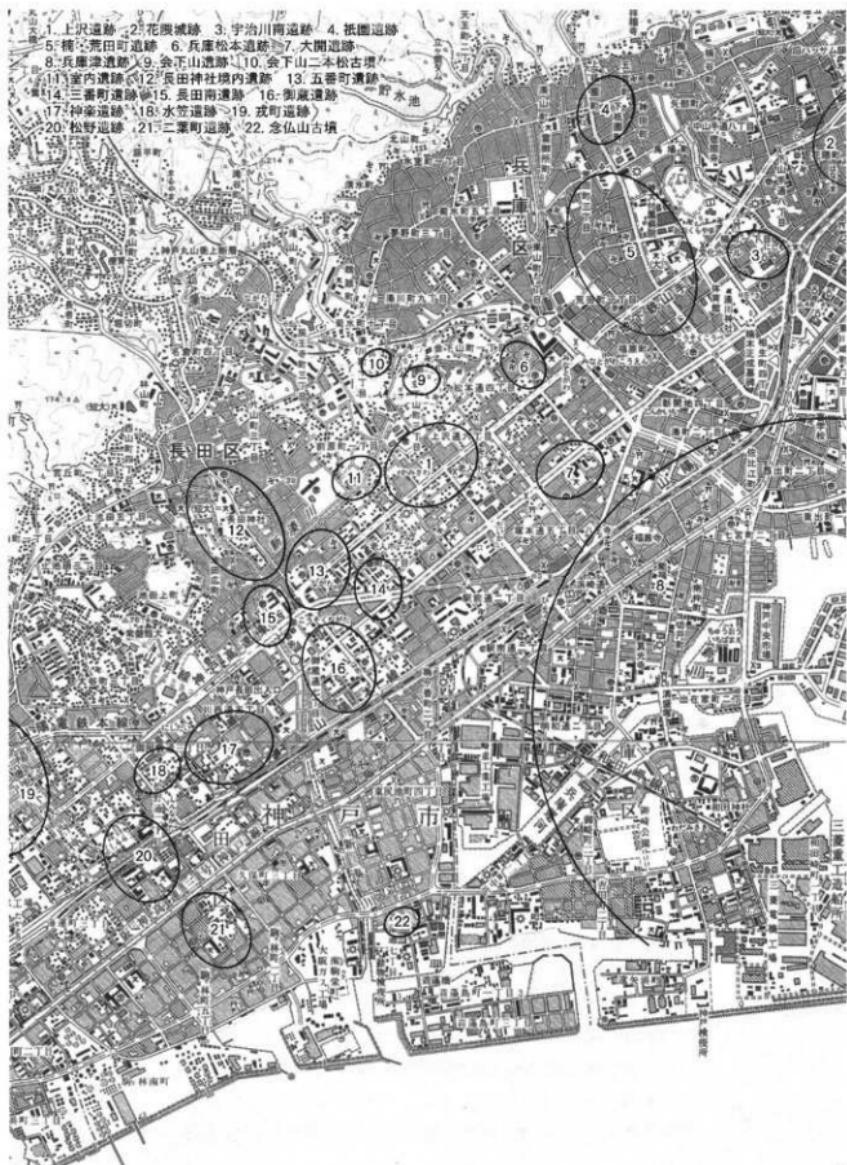


fig.2 上沢遺跡と周辺の主な遺跡 (S=1/25,000)

2. これまでの調査成果

上沢遺跡は、阪神・淡路大震災後の区画整理事業・街路拡幅事業などによって飛躍的に明らかになった遺跡で、今回報告の調査で第55次調査となる。しかし、大半を占める個人住宅建設に伴う調査では調査面積が狭く、また縄文時代後期から中世後半の遺構が錯綜するために、遺跡全体の性格が明確になっていない。そこでまず、これまでの調査で判明してきた、時代ごとの主な遺構・遺物を概観したい。

縄文時代

縄文時代後期～晩期の遺構・遺物は遺跡内で散在的に見つかっている。ただし、個人住宅建設の調査の場合、縄文時代晩期の遺構面まで調査が及んでいない可能性も考えられる。これまで確認されている遺構は土坑・ピット等で、第1・2次調査では流路中から縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器との共伴も確認されている。

弥生時代

弥生時代前期は土坑・ピット・河道等が主に遺跡南東部で見つかっている。特に第33次調査では竪穴住居の可能性がある土坑が確認されている。

弥生時代中期は遺跡北東部で竪穴住居が1棟確認されているが（第34次調査）、他の調査地においては、同時期の遺構・遺物はほとんど見つかっていない。

しかし、弥生時代後期後半に入ると、遺跡東半部で竪穴住居・溝・土坑・ピット等の遺構が確認されている。溝の検出例は多く、大量の土器を伴うのが特徴的である（第4・28・51次調査）。また、竪穴住居を取り巻く様に溝が検出される例もある（第4・9次調査）。さらに、古墳時代前期初頭にかけては、遺跡東部の山手幹線道路北側沿いで竪穴住居・掘立柱建物が多く確認されており、上沢遺跡の盛行期と考えられる。ただし、同時に盛行期をむかえている長田神社境内遺跡・御蔵遺跡と比較すると、他地域の土器等はあまり出土していない。

古墳時代

古墳時代前期の中頃から後半は、初頭まで濃密だった遺構がやや希薄な時期である。遺跡の東端には流路が流れしており、北部でも幅の広い流路が確認されていることから（第17次調査）、上沢遺跡内では生活に適さなかった可能性が考えられる。

古墳時代中期～後期は遺跡東半部では遺構が希薄な状態が続くが、西半部で竪穴住居・掘立柱建物が確認されている。また、南西部の湿地からは滑石製品がまとまって出土しており、祭祀的な様相が確認できる（第10・30次調査）。その他、輪式土器・製塙土器の出土は注目されるが、弥生時代後期～古墳時代前期初頭と比べると、集落の規模は小さいものと考えられる。

飛鳥・奈良

飛鳥時代の遺構は遺跡の南西部と北東部において、掘立柱建物が確認されている。

平安時代

奈良時代に入ると、壘青土器・石器・重圓文軒丸瓦・土馬・帶金具が出土しており、官衙的な様相を示す。上沢遺跡の北西に接する室内遺跡からは同様の瓦等が出土しており、関連性が窺える。

この時期の掘立柱建物は山手幹線道路北側沿いに多く見つかっている。建物の規模は2×3～4間の側柱建物が大半で、建物の方位に規則性はみられない。

第31次調査の井籠組井戸からは須恵器・瓦・獸骨とともに、銅鏡・小形仿製鏡が出土している。

中世

中世は掘立柱建物・井戸・木棺墓が確認されている。遺構はほぼ全域に広がるが、密度

は低く、この地域通有の中世集落の様相を呈する。河道の痕跡が多く確認できることから、たびたび小河川が氾濫していたと考えられる。

以上、上沢遺跡の概観を述べてきた。当遺跡内には縱断・横断する流路が多く存在し、たびたび集落としての機能を失っていたと考えられる。その中で、集落は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の時期に最盛期をむかえる。

また、飛鳥～平安時代前期にかけての特殊な遺物によって、この時期の上沢遺跡が一般的な集落とは異なる性格を持つと考えられる。ただし、遺構からの出土例は意外と少なく、官衙に付属する建物や工房の可能性も考えられており、いまだ判然としていないのが現状である。

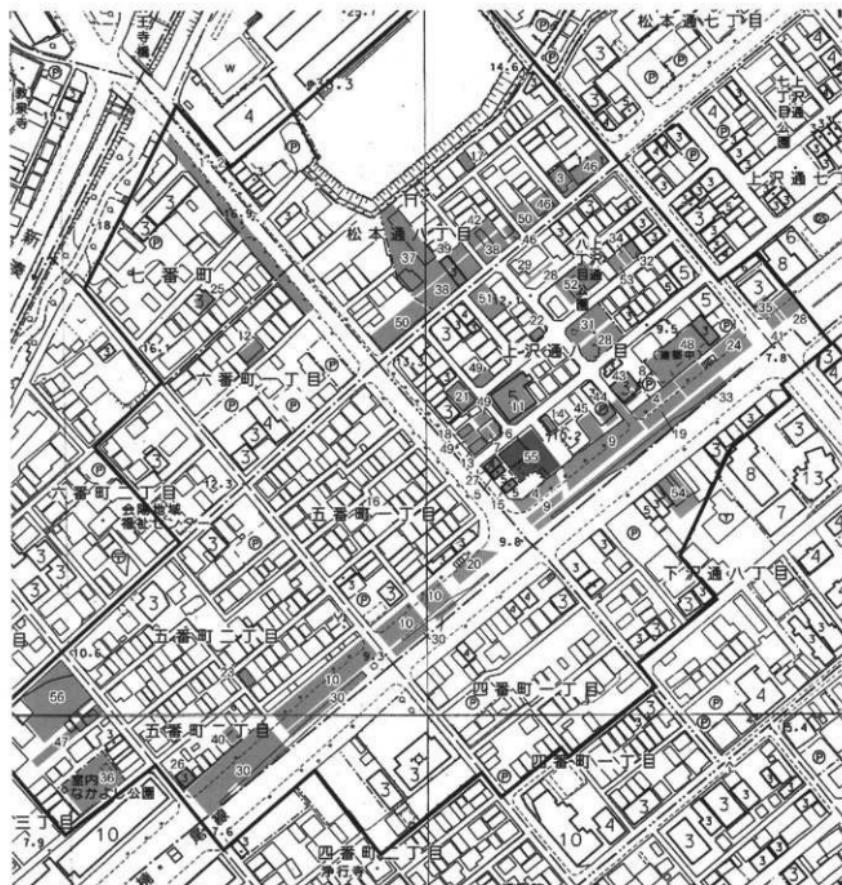


fig.3 上沢遺跡調査地点 (S=1/2,500)

次数	柱次数	調査年度	調査機関	面積 (m ²)	調査内容		参考文献
					調査内容	調査結果	
1	1	1988	神戸市教育委員会	120	弥生時代後期～古墳時代後期土坑		1
1	2	1989	神戸市教育委員会	33	鶴文時代中期～後生時代前期の自然流路・弥生時代後期～古墳時代後期の土坑		1
1	3	1989	神戸市教育委員会	600	鶴文時代中期～後生時代前期の自然流路		1
2	2	1989	神戸市スポーツ教育公社	560	鶴文時代中期～後生時代の流路・古墳時代の溝・土坑		1
3	1995	神戸市教育委員会	76	弥生時代後期の土坑・溝	弥生時代後期の土坑・溝・土坑・堀立柱建物・ビット	4	
4	1996	神戸市教育委員会	340	弥生時代前中期の土坑・溝	弥生時代前中期の土坑・溝・土坑・堀立柱建物・流路	5	
5	1996	神戸市教育委員会	31	弥生時代前中期の土坑	弥生時代前中期の土坑・堀立柱建物	5	
6	1996	神戸市教育委員会	29	弥生時代前中期の溝・土坑	弥生時代前中期の溝・土坑	5	
7	1996	神戸市教育委員会	25	中世の土坑・ビット	中世の土坑・ビット	5	
8	1996	神戸市教育委員会	340	弥生時代後期の土坑	弥生時代後期の土坑・溝・土坑・堀立柱建物	5	
9	1	1996	神戸市教育委員会	340	中世の井戸・土坑	中世の井戸・土坑	5
9	2	1996	神戸市教育委員会	406	弥生時代前中期のビット	中世の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ビット	6
10		1997	神戸市スポーツ教育公社	1,400	弥生時代後期の溝	古墳時代中期～後期の堅穴住居・掘立柱建物・堀立柱建物	6
11		1997	神戸市教育委員会	400	弥生時代前中期の土坑・溝	弥生時代前中期の土坑・溝・堀立柱建物	6
12		1997	神戸市教育委員会	60	中世の十坑・ビット	中世の十坑・ビット	6
13		1997	神戸市教育委員会	37	中世の十坑	中世の十坑	6
14		1997	神戸市教育委員会	28	弥生時代後期のビット	古墳時代後期のビット	6
15		1997	神戸市教育委員会	20	古墳時代前中期の溝・土坑	古墳時代後期の溝・土坑	6
16		1997	神戸市教育委員会	30	古墳時代前中期の溝	古墳時代前中期の溝	6
17		1997	神戸市教育委員会	40	古墳時代の流路	古墳時代の流路	6
18		1997	神戸市教育委員会	50	中世の溝	中世の溝	6
19		1998	神戸市教育委員会	170	弥生時代後期のビット	弥生時代後期後半の堅穴住居・溝	6
20		1998	神戸市スポーツ教育公社	110	中世のビット	中世のビット	6
21		1998	神戸市教育委員会	100	中世の堀立柱建物	中世の堀立柱建物	7
22		1998	神戸市教育委員会	35	弥生時代前中期の土坑	古墳時代の溝	7
23		1998	神戸市教育委員会	45	古墳時代後期の堀立柱建物	中世の堀立柱建物	7
24		1998	神戸市教育委員会	360	弥生時代前中期の土坑	弥生時代後期の土坑・堀立柱建物	7
25		1998	神戸市教育委員会	81	古墳時代後期の堅穴住居	中世の溝	7
26		1998	神戸市教育委員会	60	古墳時代後期の堀立柱建物	中世の堀立柱建物	7
27		1998	神戸市教育委員会	40	古墳時代前中期の堅穴住居	中世の堀立柱建物	7
28	1	1998	神戸市体育協会	220	弥生時代前中期の土坑	弥生時代後期後半・古墳時代中期の溝・土坑	7
28	2	1998	神戸市体育協会	80	中世の堀立柱建物	中世の堀立柱建物	7
28	3	1998	神戸市体育協会	30	古墳時代前中期の溝	中世の土坑	7

表 1. 上沢遺跡調査一覧 (1)

次数	件次数	調査年度	調査機関	面積(m ²)	調査内容	参考文献
29		1998	神戸市教育委員会	8	古墳時代後期の溝路 飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・溝・ビット	8
30		1999	神戸市体育協会	655	古墳時代後期の土坑 弥生時代後期末の堅穴住居・溝・ビット 奈良時代の井戸	8
31		1999	神戸市体育協会	290	古墳時代前期の土坑 弥生時代の溝・ビット 中世の土坑・ビット	8
32		1999	神戸市教育委員会	40	古墳時代前期の溝・ビット 奈良時代の溝・ビット 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の掘立柱建物・溝	8
33		1999	神戸市教育委員会	169	古墳時代前期の溝・土坑・ビット 平安時代中期の掘立柱建物・溝・井戸	8
34		1999	神戸市教育委員会	40	古墳時代後期末～古墳時代前期初頭の溝路	8
35		1999	神戸市教育委員会	85	古墳時代後期末～古墳時代前期初頭の溝・土坑・ビット	8
36		1999	神戸市教育委員会	600	古墳時代中期の堅穴住居	8
37		2000	神戸市教育委員会	360	古墳時代中期の溝・土坑・溝	9
38	1	2000	神戸市体育協会	162	平安時代の掘立柱建物	3・9
38	2	2000	神戸市体育協会	126	中世の溝	3・9
38	3	2000	神戸市体育協会	110	中世の鎧堀	3・9
39		2000	神戸市教育委員会	117	弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土坑・ビット 中世のビット	9
40		2000	神戸市教育委員会	20	飛鳥時代～奈良時代の溝	9
41		2000	神戸市体育協会	75	平安時代初期の土坑・溝路	9
42		2000	神戸市体育協会	75	平安時代前半の掘立柱建物	9
43		2000	神戸市教育委員会	81	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の溝・土坑 奈良時代～平安時代の河道 中世の溝・土坑	9
44		2000	神戸市体育協会	83	古墳時代中期の堅穴住居・掘立柱建物・ビット	9
45		2000	神戸市体育協会	110	弥生時代前期の土坑	9
46	1	2001	神戸市体育協会	104	平安時代前半の掘立柱建物	10
46	2	2001	神戸市体育協会	56	弥生時代後期末の土坑	3
46	3	2001	神戸市体育協会	100	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の堅穴住居・溝・土坑 奈良時代の掘立柱建物	3
47		2001	神戸市体育協会	110	古墳時代後期後半の土坑・溝・ビット 中世の溝・施跡	3
48		2002	神戸市教育委員会	330	弥生時代後期の溝 中世の井戸	11
49	1	2002	神戸市教育委員会	30	弥生時代の溝 古墳時代のビット 中世の施跡	11
49	2	2002	神戸市教育委員会	30	中世の溝・ビット	11
49	3	2002	神戸市教育委員会	27	古墳時代の土坑・ビット 中世の落ち込み・ビット	11
50		2002	神戸市教育委員会	370	古墳時代後期末の溝・土坑・ビット 古墳時代前期の土坑 平安時代のビット	3・11
51		2002	神戸市教育委員会	150	弥生時代前期の土坑 弥生時代後期～古墳時代前期初頭の堅穴住居・溝 平安時代のビット	11
52		2004	神戸市教育委員会	40	古墳時代後期初頭の土坑・ビット 古墳時代後期後半の堅穴住居・溝 平安時代の土坑	12
53		2006	神戸市教育委員会	40	弥生時代後期後半の堅穴住居・溝 中世の土坑・ビット	12
54		2006	神戸市教育委員会	200	古墳時代後期の堅穴住居・溝・土坑・ビット	12
55		2007	神戸市教育委員会	500	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の溝 中世の溝・井戸・木棺墓	12
56		2008	神戸市教育委員会	455	奈良時代の掘立柱建物	12

表 2. 上浜遺跡調査一覧 (2)

3. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査対象地については、株式会社アーバネックスから提出された共同住宅の建設に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼書（19121105）に基づき、平成19年9月7日に試掘調査を実施した。2ヶ所に設定した試掘坑において遺物包含層が確認されたため、発掘調査が必要な旨、9月12日付け教育長名で回答した。

(2) 発掘調査の経過

試掘調査の結果を受けて、共同住宅建設予定地500m²について発掘調査を実施することで協議が整った。平成20年1月7日調査の準備に入り、1月8日I区より重機掘削を開始した。遺物包含層を掘削し、第1遺構面を検出した。遺構は希薄であった。1月18日I区第1遺構面の全景写真を撮影した。その後、第2遺構面へむけて遺物包含層を掘削した。溝・土坑・ピット等の遺構を検出し、1月31日第2遺構面の全景写真を撮影した。2月1日ラフタークレーンによる測量・撮影を実施し、その後、ピットの断ち割りを実施した。

2月7日から遺物包含層を掘削し、第3遺構面を検出した。埋土に土器を多く含んだ溝やピットを多数検出し、出土状況の写真・図化作業を実施した。2月21日第3遺構面の全景写真を撮影し、その後、ピット断ち割りを実施した。

3月3日からI区を埋め戻し、II区の重機掘削を開始した。第1遺構面の遺構を検出し、II区の大半を占めるSR101を掘削した。3月7日全景写真を撮影した。その後、ST101検出。調査区外へと拡がるため、一部拡張してST101の全容を調査し、写真・図化作業を実施した。第2遺構面の土坑・ピットを掘削した。3月24～25日II区を埋め戻し、現地での調査を完了した。

平成20年度は遺物整理作業を受託した。遺物水洗・復元作業、遺物実測作業、遺構・遺物トレース作業、遺物写真撮影を実施し、発掘調査報告書を作成・刊行した。



fig.4 作業風景

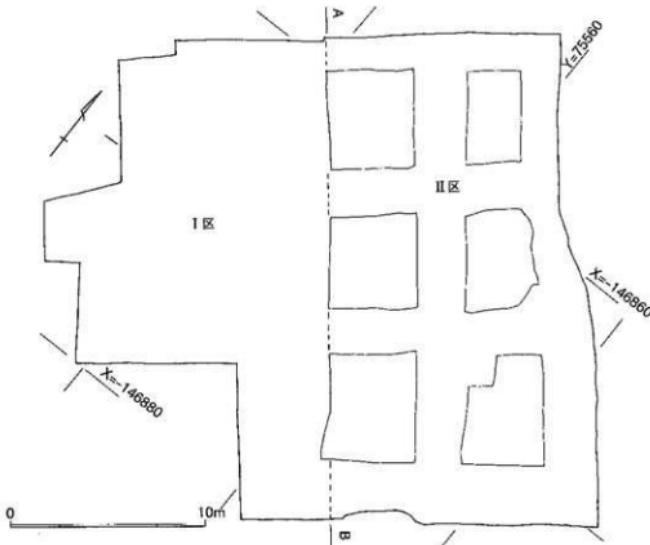


fig.5 調査区地区割図

1. 参考文献

- | | |
|--------|---|
| 上沢遺跡 | 1. 阿部敬生「上沢遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1995 |
| | 2. 石島一和『上沢遺跡発掘調査報告書 第35次調査』神戸市教育委員会 2000 |
| | 3. 谷正俊編『上沢遺跡III 第38・46・50次調査』神戸市教育委員会 2001 |
| | 4. 『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998 |
| | 5. 『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999 |
| | 6. 『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000 |
| | 7. 『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001 |
| | 8. 『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002 |
| | 9. 『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2003 |
| | 10. 『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2004 |
| | 11. 『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005 |
| | 12. 『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2007 |
| 金下山遺跡 | 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 歴史編』自然・考古』神戸市教育委員会 1989 |
| 宇治川南遺跡 | 丹治廉明他「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986 |
| 雲井遺跡 | 安田滋他「雲井遺跡第4次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994 |
| | 常山直人「雲井遺跡第25次調査」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009刊行予定 |
| 生田遺跡 | 中谷正「生田遺跡第4次調査発掘調査概要」神戸市教育委員会 2006 |

五番町遺跡	松林宏典「五番町遺跡第5次調査」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1997
	阿部敬生「五番町遺跡第7次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002
長田神社境内遺跡	黒田恭正編「長田神社境内遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1990
大開遺跡	前田作久編「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993
戎町遺跡	山本雅和「戎町遺跡第1次調査概報」神戸市教育委員会 1989
	山口英正「戎町遺跡第15次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
楠・荒田町遺跡	丸山廣編「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980
	丸山廣「楠・荒田町遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会 1990
	黒田恭正「楠・荒田町遺跡第11次調査」「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1995
	別府洋二他「楠・荒田町遺跡」「平成10年度年報」兵庫県教育委員会 1999
兵庫松本遺跡	中谷正編「兵庫松本遺跡第2~4・12・17・19次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2005
会下山二本松古墳	黒田恭正「会下山二本松古墳」「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1987
松野遺跡	千葉治編「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1983
	山口博史編「松野遺跡発掘調査報告書」第3~7次調査 神戸市教育委員会 2001
神楽遺跡	菅本弘明「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981
水笠遺跡	山口英正・阿部敬生「水笠遺跡第26次調査」「平成15年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2006
念仏山古墳	喜谷美宜「市街地に消えた古墳—念仏山古墳—」「神戸市立博物館研究紀要」第6号 1989
室内遺跡	水口富夫他「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県教育委員会 1998
御蔭遺跡	安田滋他編「御蔭遺跡第4・6・14・32次調査報告書」神戸市教育委員会 2001
	安田滋編「御蔭遺跡第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会 2001
	谷正俊編「御蔭遺跡V」「第26・37・45・51次調査」神戸市教育委員会 2003
祇園遺跡	當山直人「祇園遺跡第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000
二葉町遺跡	川上厚志編「二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001
花隈城跡	山口英正「花隈城跡3次調査」「平成18年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2009刊行予定
兵庫津遺跡	内藤俊哉「兵庫津遺跡第15次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001
	黒田恭正「兵庫津遺跡第20次調査」「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2002

II. 遺構と遺物

1. 調査の概要

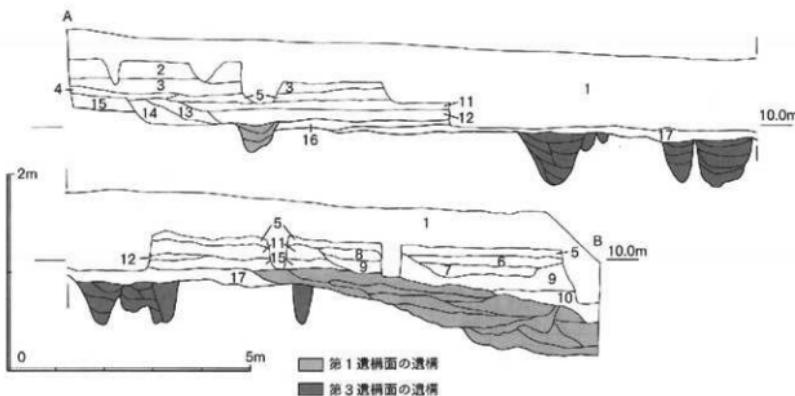
(1) 調査の方法

掘削残土の仮置きの都合上、南北に分割して調査を実施しており、調査を実施した順に南半分をⅠ区、北半分をⅡ区と呼んでいる。またⅡ区については、工事による影響を受けない部分があるため、幅2~3mのトレンチによる調査を実施している。

(2) 基本層序

現況は盛土によりほぼ平坦な地形であるが、旧地形は北から南へ緩やかに傾斜している。また、西から東へも緩やかに傾斜している。基本的な層位は上層より、盛土・攪乱、明黄灰色細砂、淡灰色細砂、明灰色シルト混じり細砂、灰色砂混じりシルト（中世の遺物を含む。下面が第1遺構面）、暗褐色砂混じりシルト（古墳時代中期～平安時代前半頃の遺物を含む。下面が第2遺構面）、暗褐色シルト（弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む。下面が第3遺構面）、暗黒褐色細砂混じりシルトである。弥生時代後期以前の遺構・遺物は確認していない。

北から南へ傾斜しているため、Ⅱ区の堆積はⅠ区に比べ少なく、また上層の攪乱や第1遺構面の遺構等により削平されているため、Ⅱ区においては、第2・3遺構面の遺構は同一面で検出されている。



1. 盛土・攪乱
2. 明黄灰色細砂
3. 淡灰色細砂
4. 淡灰白色シルト混じり細砂
5. 明灰色シルト混じり細砂
6. 淡灰白色細砂
7. 灰白色シルト混じり細砂
8. 明灰色細砂
9. 灰色細砂
10. 灰色シルト
11. 明葉橙色細砂
12. 淡灰色砂礫
13. 明褐色シルト混じり細砂
14. 淡灰褐色細砂混じりシルト
15. 灰色砂混じりシルト（第1遺構面遺物包含層）
16. 暗褐色砂混じりシルト（第2遺構面遺物包含層）
17. 暗褐色シルト（第3遺構面遺物包含層）

fig.6 土層断面図

2. 第3遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期）

第3遺構面の遺構には清10条、土坑2基と、多数のピットがある。遺構はI区に集中しており、II区の遺構は削平されていることもあって、土坑のみと希薄である。出土遺物から弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面と考えられる。國化可能な遺物が出土している遺構を中心に報告する。

(1) 溝

SD301

I区北に位置する、北から南東方向へ緩やかに弧を描く溝である。最大幅0.8m、深さ0.4mを測る。断面は緩やかなU字状を呈する。南東側は調査区外へ延びる。埋土からは壺・甕・高环・鉢・手づくね土器が大量に出土している。甕は完形のものが多く、約20個体のうち多くが上層埋土から出土している。下層の埋土からは完形の土器よりも破片が多く出土していることから、一括して投棄されたのではなく、何度か投棄を繰り返しながら、埋まつたものと考えられる。その時期は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭（以降、庄内期と呼ぶ）と考えられる。

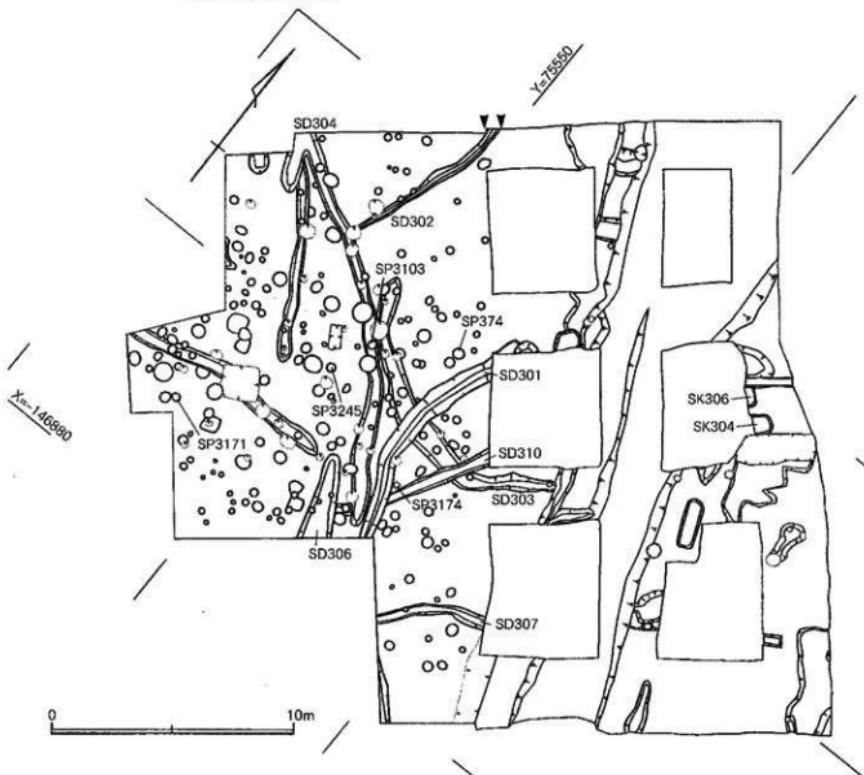


fig.7 第3遺構面の遺構

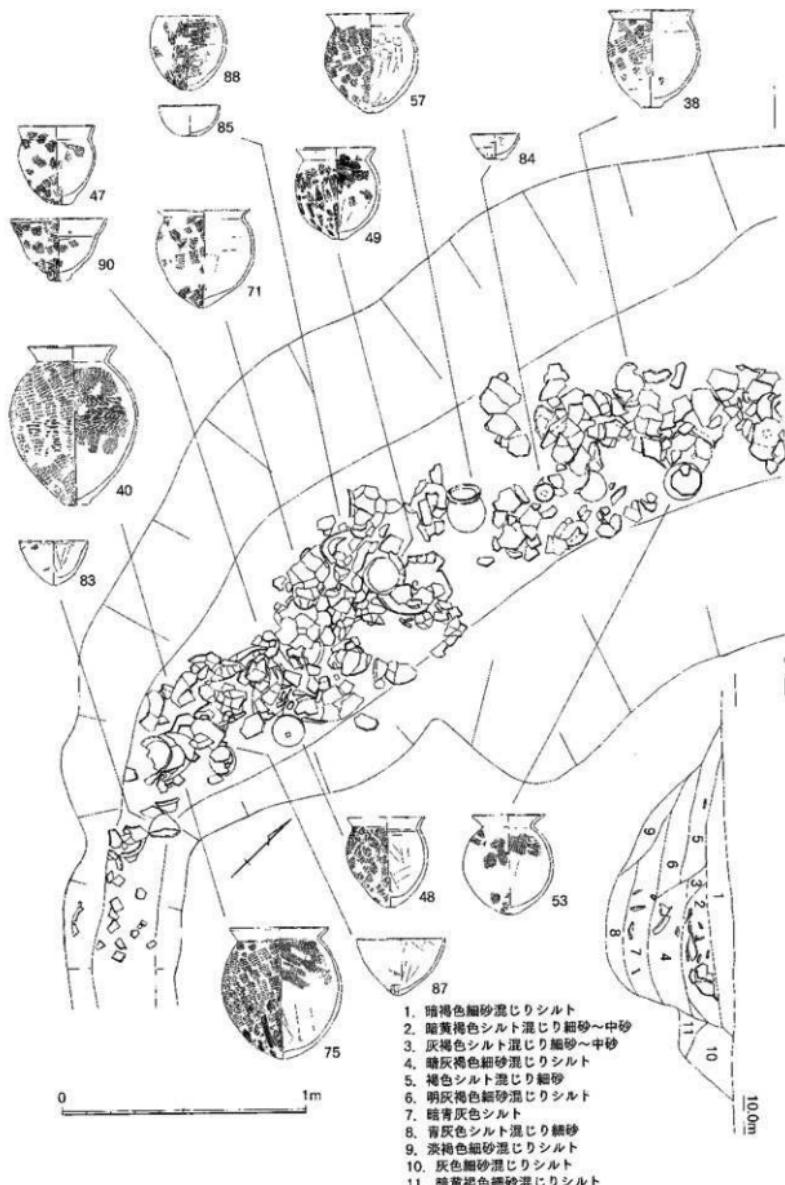


fig.8 SD301平面・断面図（土器スケールは1/8）

壺は直口壺・広口壺・二重口縁壺が出土している。破片のものが多い。4は完形のミニチュアの壺で、口径7.4cm、器高8.8cmを測る。6は口径11.0cm、器高21.7cmを測り、短く外反する口縁部をもつ。7は口径20.8cm、外面に5条/単位の波状文を2段施す二重口縁壺である。8は口径16.6cmを測る二重口縁壺である。器壁が厚く、大型になると考えられ

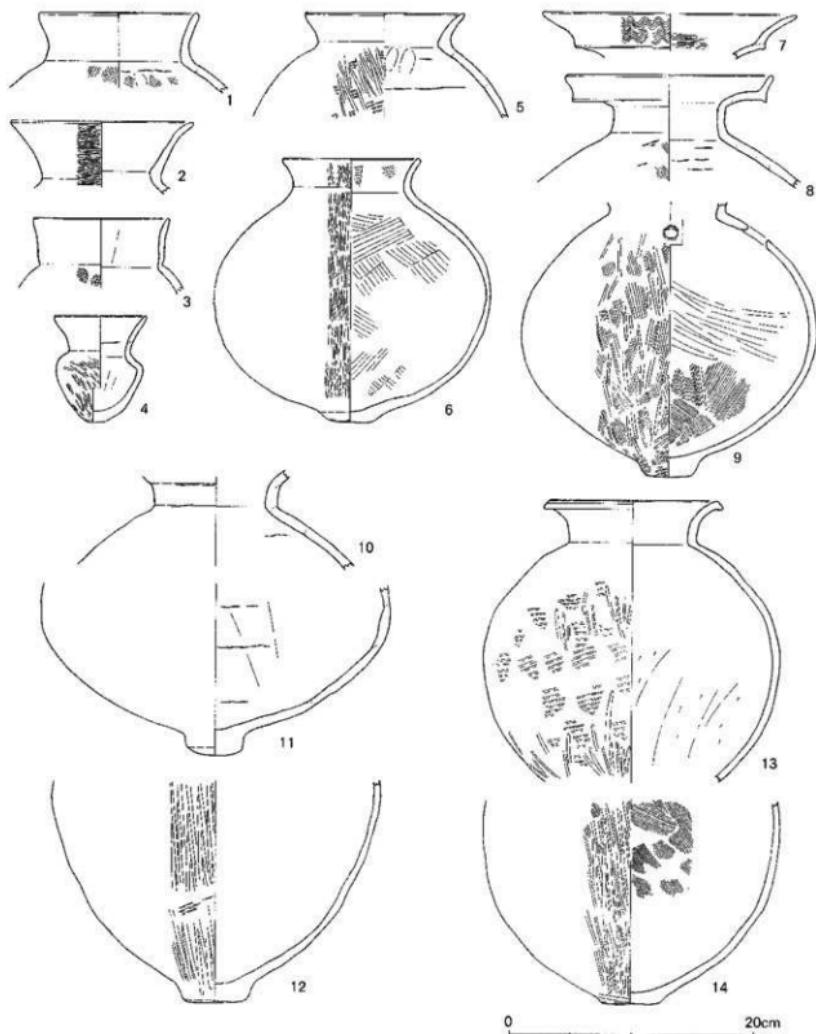


fig.9 SD301出土遺物（1）

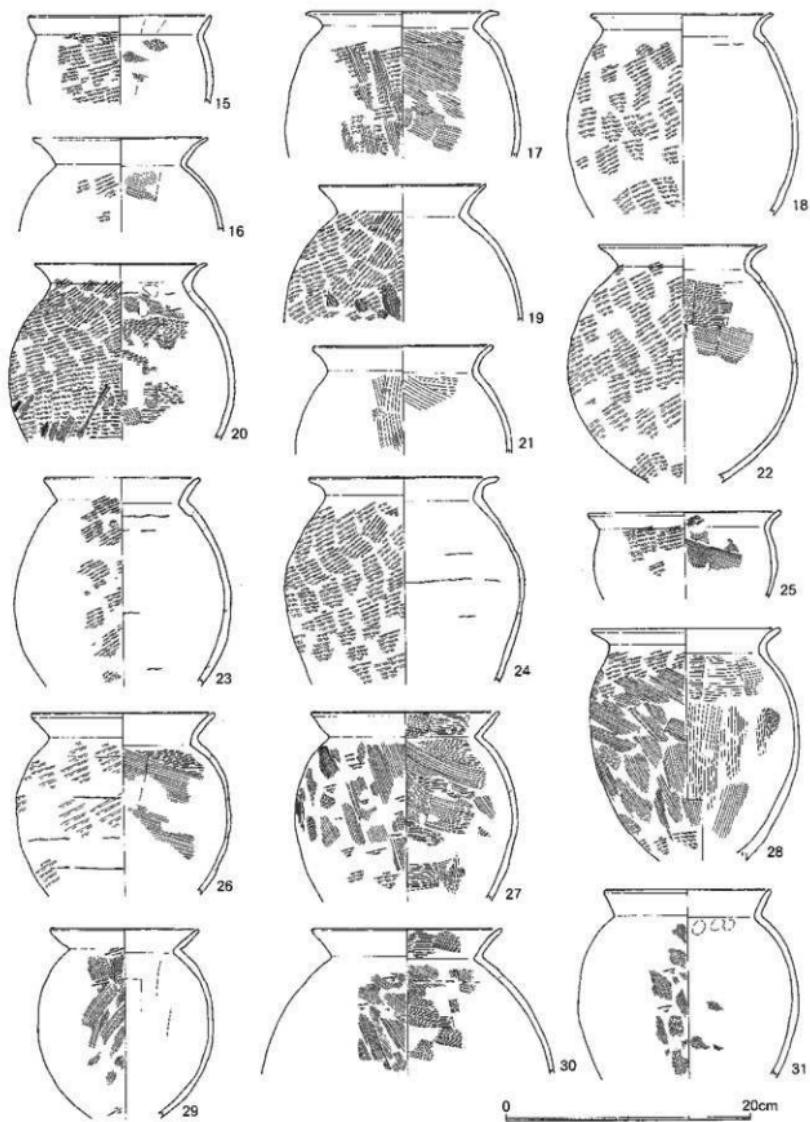


fig.10 SD301出土遺物（2）

る。口縁部外面はナデ調整、内面は摩滅により調整不明である。9は厚い平底の底部をもち、肩部には焼成後に直径1.0cmの円孔を穿孔している。外面調整はタタキの後、ハケ調整を施し、さらに全体に粗くヘラミガキ調整を施す。10・11は胎土等から同一個体と考えられる。13は口径13.6cm、外反して面をもつ口縁部には1条の沈線をめぐらす。体部下半の内面にはケズリを施す。

この溝から出土した遺物の大半は壺である。口縁部の形態から、端部を丸く収めるもの(15~24・32~34・36・37・45・47~50・53・55~59・61・66・67・71~75)、端部に面をもつもの(25~31・38~41・46・60・65・68)、端部に面をもち上方につまみ上げるもの(42~44・62~64)に分けられる。大半は口縁部端部を丸く収めるものが占める。また、頸部は鋭く屈曲するものが多く確認できる。

底部はしっかりした平底のもの(33~38・40~45)、平底が形骸化したもの(47~61)、尖底ないし丸底のもの(66・69~75)に分けられる。平底の形骸化したものが最も多く、尖底なし丸底のものがやや少ない傾向にある。

さらに、体部最大径は上部のもの、中位のものがあり、中位のものが大半を占め、球形に近い体部をもつものが多い。器壁は厚いものと薄いものがあるが、大半は厚い。

また、大きさから器高が15cmまでの小型のものと、20cmまでの中型のものと、20cm以上の大型のものに分けられる。中型のものは口縁部から底部まで残存している個体が少なかった。中でも、45は器高23.2cm、体部最大径が25.5cmを測る大型品である。

外面調整はタタキだけのものが大半を占め、その後、体部全体にハケ調整を施すもの(17・21・28~31・49・50・53・64・72)、肩部だけにハケ調整を施すもの(27・73)、体部下半にハケ調整を施すもの(19・20・59・67・75)に分かれる。また、タタキの後、部分的にヘラミガキを施すもの(42・51・55)、板ナデ調整を施すもの(74)、底部にケズリを施すもの(72)がある。タタキの大半は右上がりタタキである。確認できた左上がりタタキは32・67のみである。

内面調整には、ナデ調整、板ナデ調整、ハケ調整があり、ケズリが確認できたのは68のみである。

高环は破片も含め他の器種に比べ、出土量が極端に少なく、時期の決め手となる器種ではあるものの、図化可能だったのは3点であった。76は口径21.6cm、器高13.4cmを測る。坏体部の屈曲が緩く、坏部と脚部の接合は押入付加法による。脚部の穿孔は4方向である。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。77・78は椀形の高环で、78は口径11.6cm、器高8.3cmを測る。

鉢は小型のものばかりで、「く」字形の頭部をもつもの(89・90)、底部に穿孔のあるもの(86・87)が混じるが、大半は椀形で単純口縁のものである。脚台のつくものはない。81・82は底部に木葉压痕が残る。85は口径9.8cm、器高5.1cm、調整は内外面とともにナデ調整である。88は口径10.0cm、器高12.3cmを測り、紡錘形を呈する。

91・92は手づくね土器である。内外面ともにナデ調整である。93は欠損しているが投弾形土器と考えられる。外面にはヘラミガキを施す。

以上から、この溝から出土した壺には庄内式壺は含まれないものの、庄内式壺の影響を

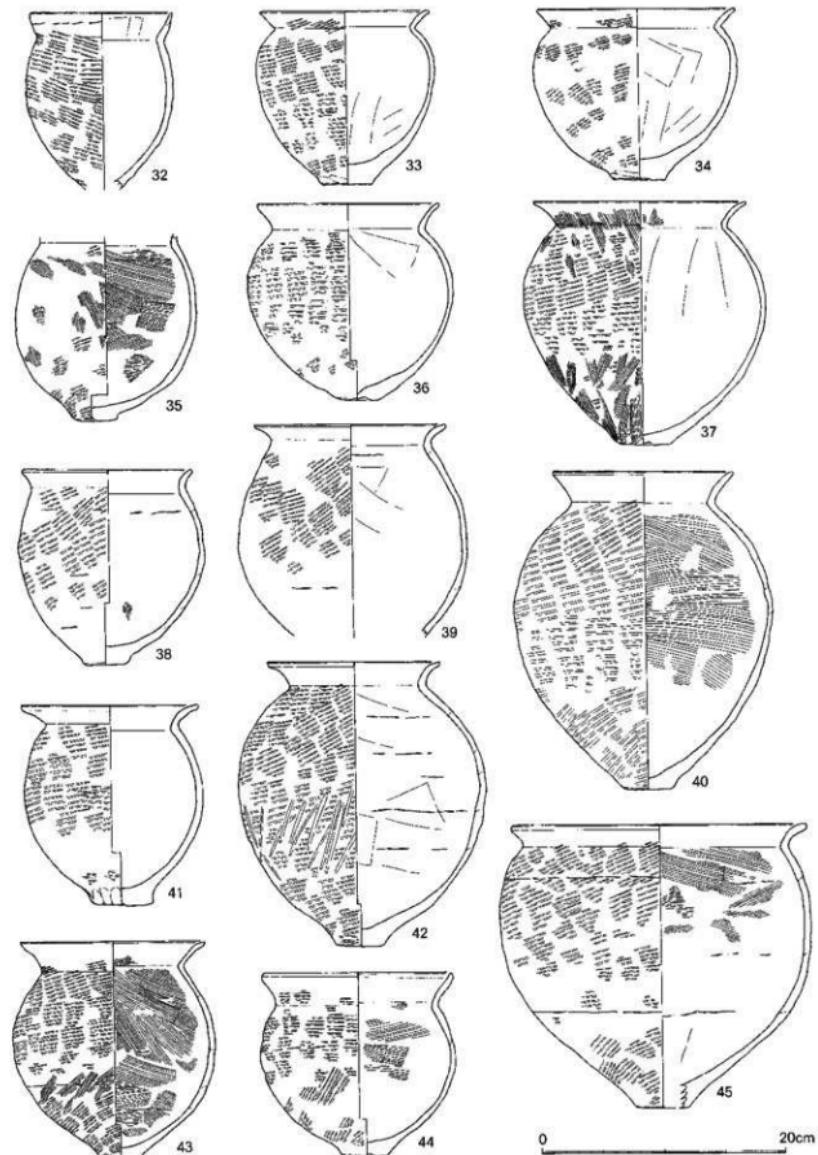


fig.11 SD301出土遺物（3）

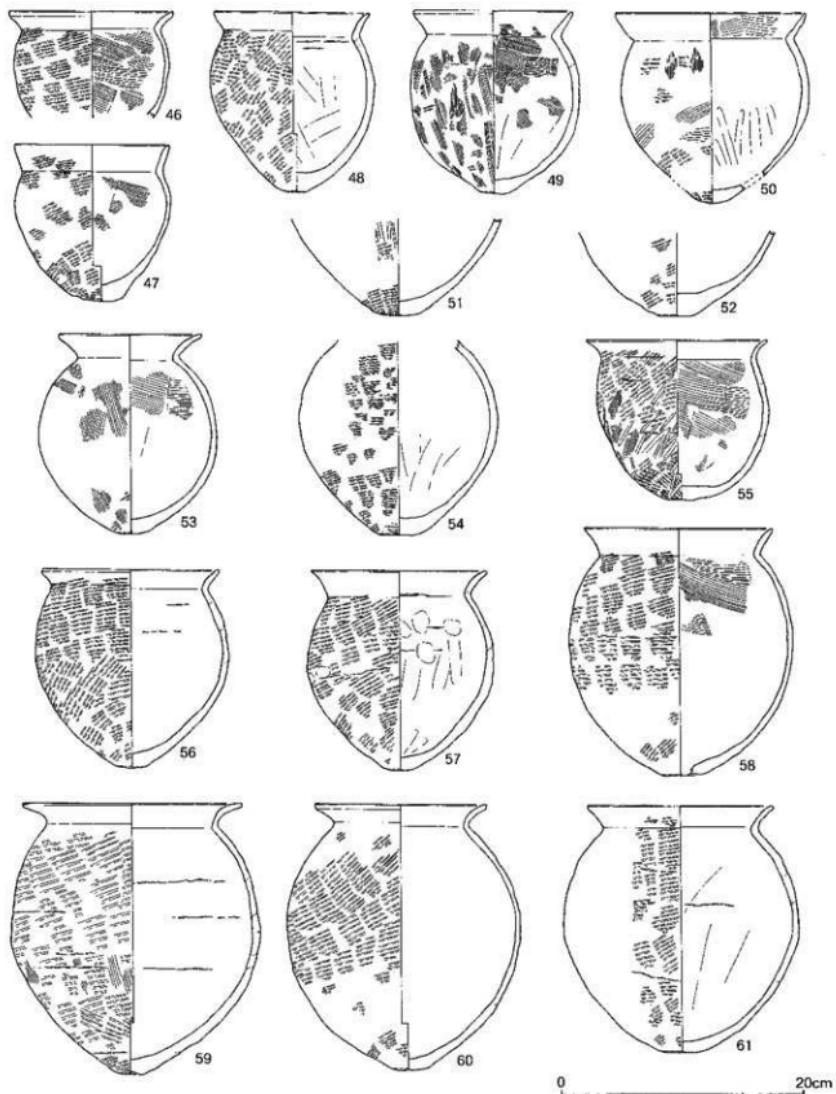


fig.12 SD301出土遺物（4）

受けたと考えられる庄内形甕が半数以上を占めると考えられる。また、布留式甕・布留形甕と考えられる甕は出土していないが、広口甕が少ないとからも、庄内期でも新しい段階に属する一群と考えられる。

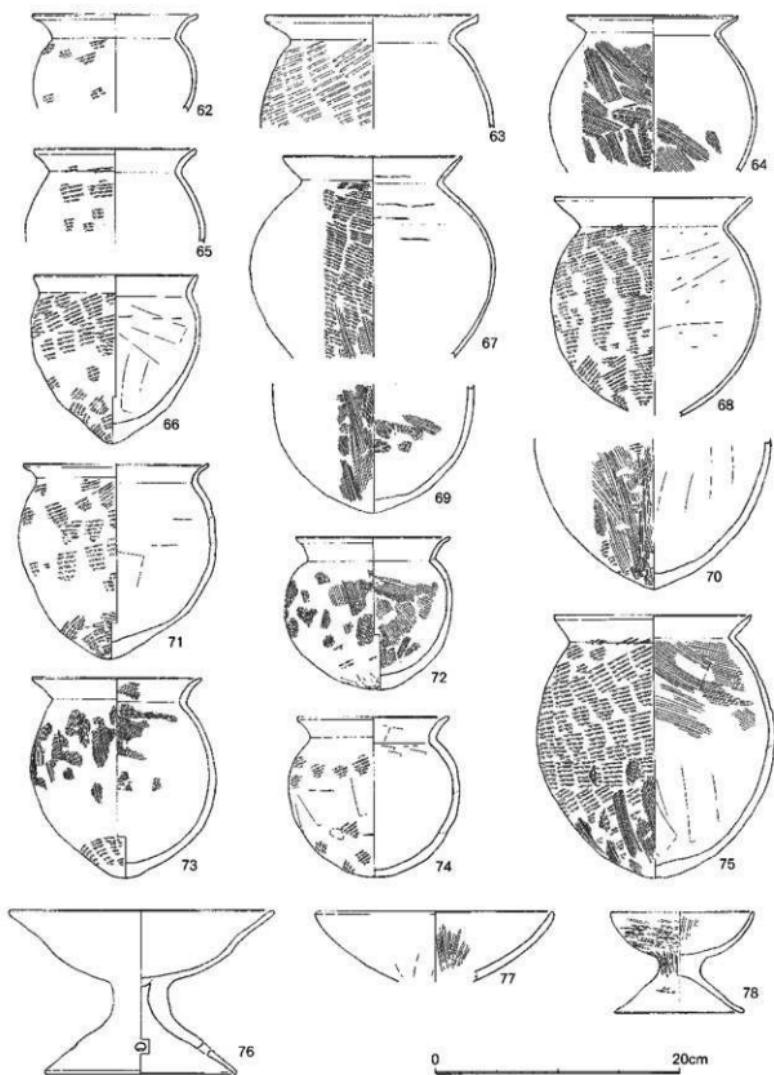


fig.13 SD301出土遺物（5）

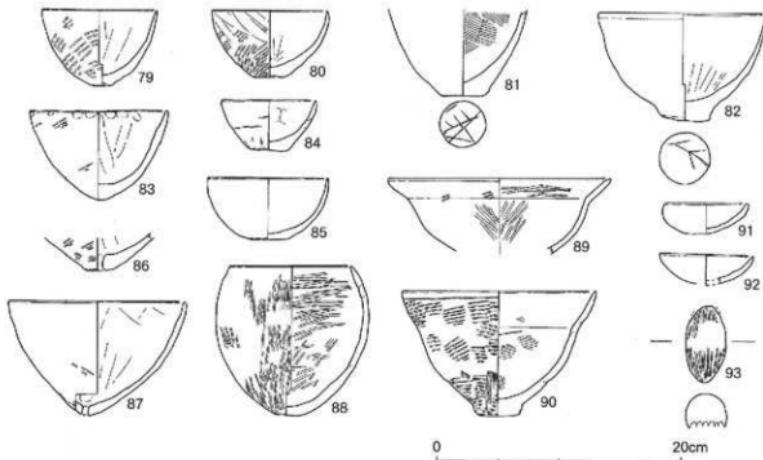
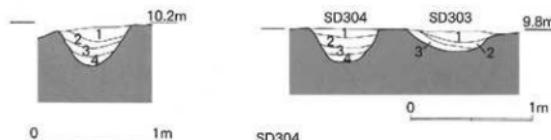


fig.14 SD301出土遺物（6）

SD302 I区北端に位置する、北から南西方向へ緩やかに弧を描く溝である。幅0.4m、深さ0.3mを測る。断面はU字状を呈し、北側は調査区外へ延びる。埋土からは壺が出土している。壺94は口径10.8cm、体部は球形で、口縁部はまっすぐのび、端部で外反する。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。古墳時代前期と考えられ、第3遺構面において時期の判明する溝の中では最も新しい。

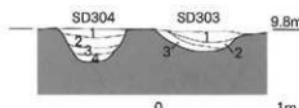
この溝からは半剖状態の炭化したモモ核が1点出土している。上下端を欠損しており、残存長は17.6mm以上を測る。モモはバラ科サクラ属の落葉小高木であり中国原産である。列島には縄文時代・弥生時代以降の出土例が多く存在し、栽培樹として定着している。

SD303 I区北に位置する、北から東方向へ弧を描く溝である。SD301に切られる。幅0.7m、深さ0.3mを測る。断面は浅いU字状を呈する。土器は細片のため図化できていない。



1. 棕褐色シルト混じり中砂～粗砂
2. 暗褐色シルト混じり細砂
3. 灰褐色細砂混じりシルト
4. 緑青色細砂

fig.15 SD302断面図



- SD304
 1. 褐色シルト混じり細砂
 2. 黄褐色シルト混じり細砂
 3. 暗灰褐色細砂混じりシルト
 4. 褐色シルト混じり細砂
- SD303
 1. 褐色シルト混じり細砂
 2. 黄褐色シルト混じり細砂
 3. 暗褐色細砂混じりシルト

fig.16 SD303・304断面図

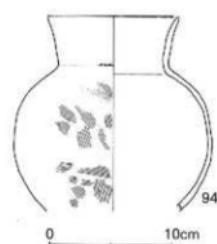


fig.17 SD302出土遺物

SD304

I区中央に位置する、北西から南東方向へ緩やかに弧を描く溝である。幅0.4m、深さ0.3mを測る。北西側は調査区外へ延びる。断面はU字状を呈し、底面は平坦である。埋土からは甕が出土している。

壺95は口径13.4cm、口縁部外面に8条/単位の波状文を2段施した後、4個/周の円形浮文を貼り付ける。口縁部内面にも波状文を2段施した後、刺突文を施す。また頭部外面にもヘラミガキの後、波状文を2段と刺突文が確認できる。

SD306

I区南に位置する、北西から南東へ延びる溝である。最大幅1.3m、深さ0.4mを測る。南側は調査区外へ延びる。断面は緩やかなU字状を呈し、底面は部分的に深くなる。埋土からは甕が出土している。庄内期と考えられる。

96は口径15.2cm、球形の体部から外反する口縁部をもち、端部は面をもつ。97は口径12.0cm、調整は内外面ともにナデ調整である。

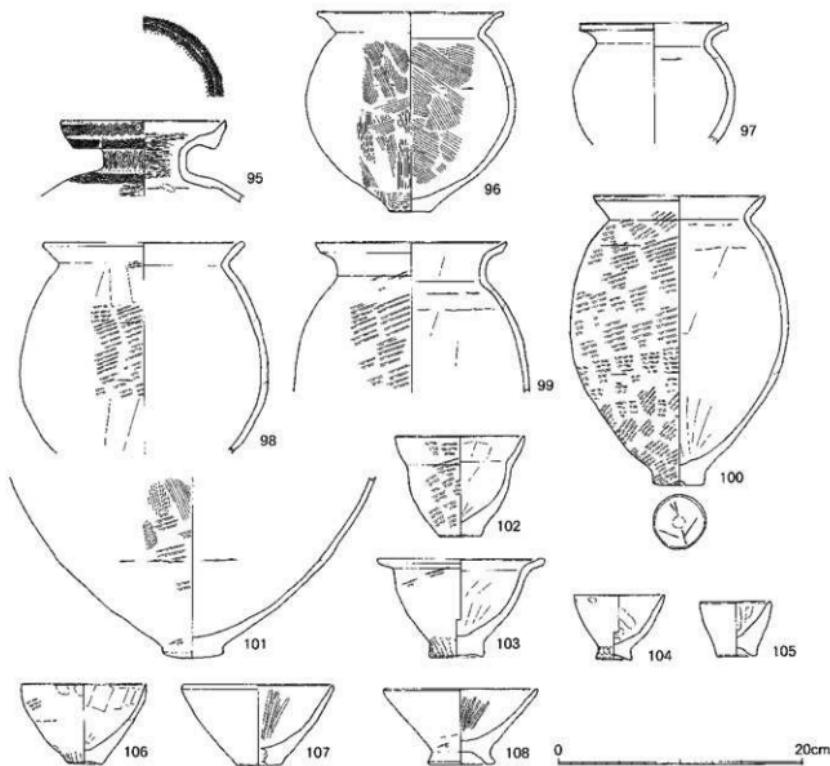


fig.18 SD304・306・307出土遺物
(95:SD304 96・97:SD306 98~108:SD307)

SD307

I区南に位置する、北東から南西方向へ緩やかに弧を描く溝である。幅0.4m、深さ0.45mを測る。断面はU字状を呈し、底面は平坦である。南西側は調査区外へ延びる。埋土からは甕・鉢が出土しており、小型の鉢が多い。庄内期と考えられる。

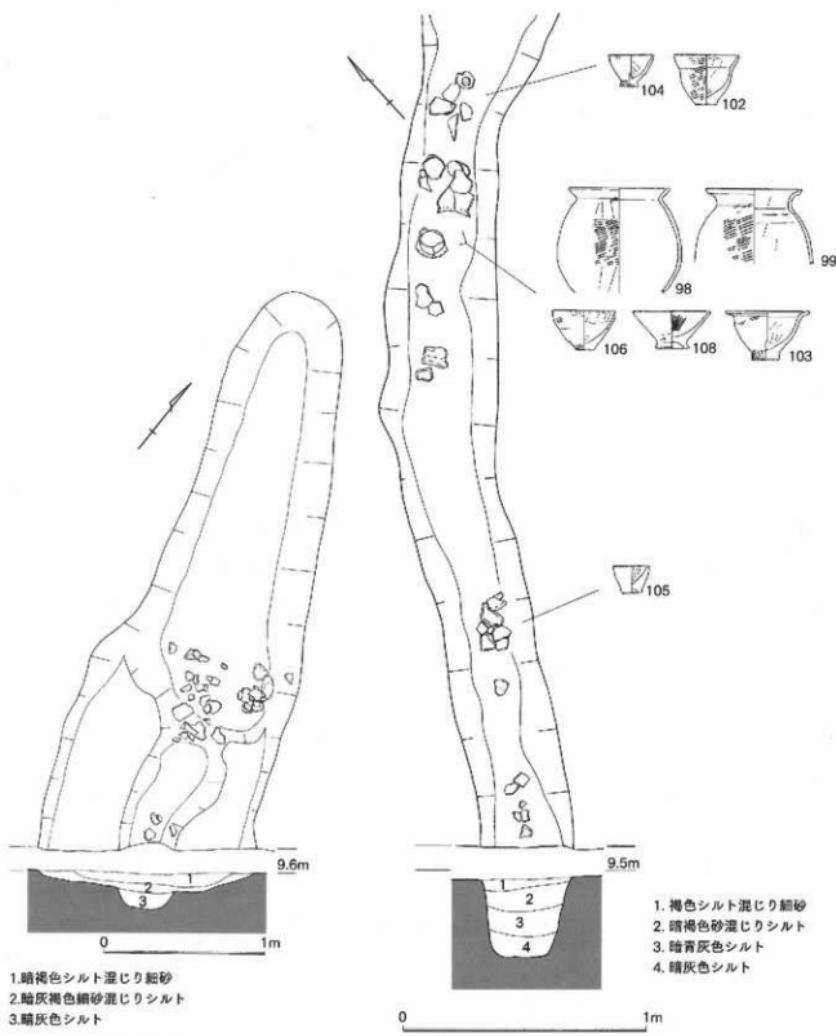


fig.19 SD306平面・断面図

fig.20 SD307平面・断面図

堀98は口径16.4cm、体部下半に最大径があり、口縁部は丸く收める。外面はタタキの後、肩部と下半部に板ナデ調整を施す。内面はナデ調整である。99は口径15.6cm、口縁部端部に面をもち、上方につまみ上げる。外面のタタキは粗い。100は口径14.0cm、器高23.5cmを測る。しっかりした平底の底部には木葉压痕がある。

鉢は「ぐ」字形の頭部をもつもの（102・103）、外反する口縁部をもつもの（104～108）がある。底部の形状は平底のものが大半を占め、108は低い脚台をもつ。106は完形の鉢で、口径10.2cm、器高6.4cmを測る。

(2) 土坑

SK304

II区北東に位置する幅0.8m、深さ0.4mを測る土坑である。断面は急な立ち上がりで、底面は平坦である。西側は調査範囲外へ拡がる。埋土からは甕・鉄鎌が出土している。

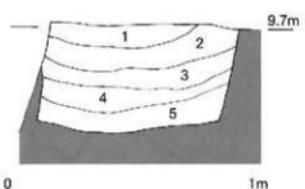
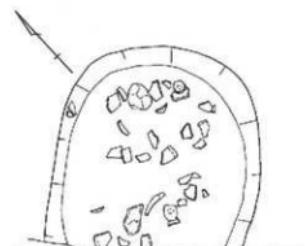
甕109は口径15.2cm、球形の体部から外反する口縁部をもつ。内面の調整は摩滅により不明である。

111は小型の鉄鎌である。先端と基部を欠損する。残存長は9.1cm、身幅は約2.0cm、身の厚さ1.3mm、残存重量7.0gを測る。基部付近はほぼ直線的に、その先は大きく緩やかに湾曲させており、先端は欠損するため不明であるが、急速に角度を強めて屈曲するものと思われる。また基部周辺の表裏には鋸化した草本類遺体が説着している。これは柄の固定など鎌本来の機能に関連するものか、あるいは埋納行為など二次的な使用に伴うものであるかは明らかでない。

SK306

II区北東に位置する土坑である。北側は攪乱により削平され、西側は調査範囲外へ拡がる。埋土からは鉢が出土している。

鉢110は口径9.4cm、器高6.2cmを測る。内外面ともにナデ調整である。



1. 茶褐色シルト混じり細砂
2. 暗灰色細砂混じりシルト
3. 暗茶灰色細砂混じりシルト
4. 暗灰褐色細砂混じりシルト
5. 暗灰色シルト

fig.21 SK304平面・断面図

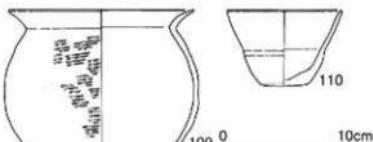


fig.22 土坑出土遺物
(109: SK304 110: SK306)

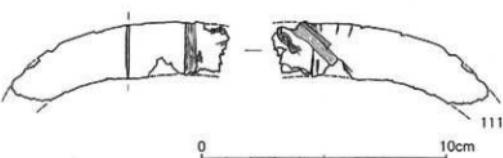


fig.23 SK304出土遺物

(3) ピット

第3造構面で検出したピットは約160基で、直径は0.2~0.8m、深さ0.1~0.5mの範囲に収まる。溝と切り合うピットも多いが、溝より先行するものはない。炭化可能な遺物が出土しているピットを報告する。

SP3103はI区中央に位置する。SD304と切り合う。柱根が残存している。115は直径12.2cm、残存長47.3cmを測る。

SP3171はI区西端に位置する。小型の鉢が出土している。113は口径13.4cm、器高5.4cmを測り、楕形を呈する。外面はタタキの後、ナデ調整である。

SP3174はI区南東に位置する。鉄鎌が出土している。114は身部中央付近の約14.5cm分のみ残存し、先端および基部は欠損する。身の最大幅は2.8cm、厚さ3.7mm、残存重量38.6gを測る。全体に細くカーブしており、片刃である以上、詳細は不明である。X線透視像の観察では、劣化の著しいことを確認したが、スなど、鋸造を示唆する痕跡は見られず、鍛造によって製作されたものと推測される。また、有機質の付着も観察されなかった。

なお、この鉄鎌の他に遺物が出土していないので判別できないが、上層のピットの見逃しであった可能性も考えられる。

SP3245はI区中央に位置する。壺の口縁部が出土している。112は口径18.8cmを測る二重口縁壺である。器壁が厚い。

(4) 遺構に伴わない遺物

第3造構面の遺物包含層である暗褐色シルト、暗灰色砂混じりシルト、及び造構検山中に出土した土器の大半は、I区から出土している。特に117~121はSD301上面付近から出土している。

117は口径9.0cm、器高11.0cmを測る小型の甕で、外面はタタキの後、ナデ調整を施す。器壁が厚い。118は口径10.0cm、器高7.3cm、大きく外反する口縁部をもつ。外面はナデ調整である。甕119は口径14.8cm、器高17.2cmを測る。外面には細かいタタキを施すが、粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る。底部はしっかりとした平底で器壁も厚いが、球形の体部をもつ。

120は浅い楕形の高杯で、外面はヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。

鉢の大半は小型品で、底部のある楕形を呈する。121は脚台をもつ、やや大型の楕形を

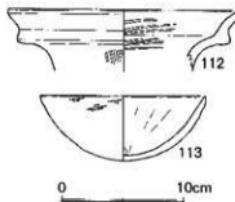


fig.24 ピット出土遺物
(112:SP3245 113:SP3171)

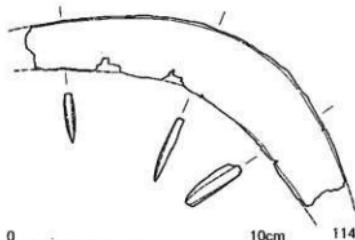


fig.25 SP3174出土遺物

呈する鉢である。口径17.8cmを測る。外面はナデ調整である。122は口径10.6cm、器高4.6cmを測る完形の鉢である。125は口径10.0cm、器高6.4cm、内外面は板ナデ調整を施し、底部外面は指押えで仕上げる。127は口径12.8cm、器高7.9cm、外面の調整は摩滅のため不明である。

128は敲き石と考えられる。外面に一部焼けた痕跡がある。重量229.4g、比重2.52を測る。129はすり石と考えられる。重量138.1g、比重2.60、どちらも砂岩と考えられる。

116は鉄錠で、平面形状より雁股式鉄錠に分類できるが、刃部の割り込みは浅い。刃部先端をやや欠損しており、残存長は7.8cm、刃部幅2.8cm、残存重量9.2gを測る。上層からの混入と考えられる。

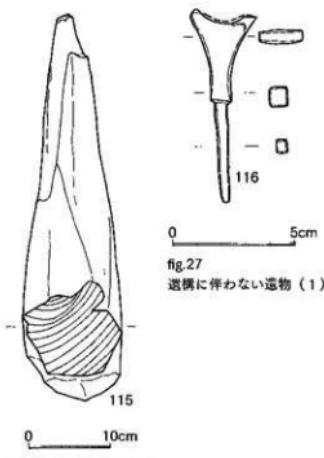


fig.27
遺構に伴わない遺物 (1)

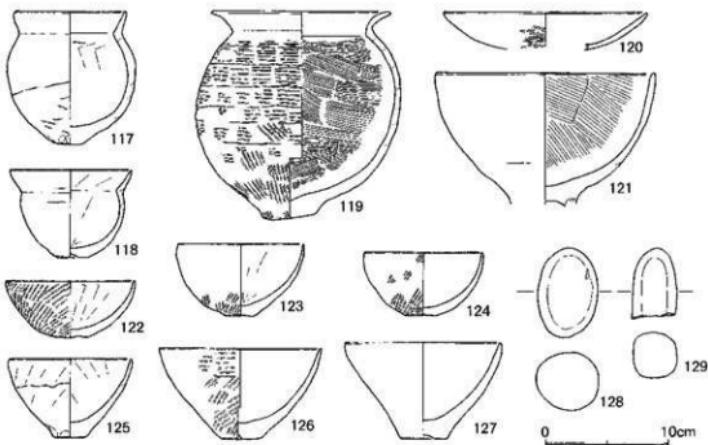


fig.28 遺構に伴わない遺物 (2)

3. 第2遺構面（古墳時代中期～平安時代前半）

溝1条、土坑2基、ピット多数を検出している。遺構埋土からの遺物は少なく、遺物包含層に含まれる遺物の時期から、古墳時代中期～平安時代前半頃の遺構面であると考えられる。固化可能な遺物が出土している遺構を中心に報告する。

(1) 土坑

SK202

I区南に位置する不整形な円形を呈する土坑である。幅1.3m、深さ0.2mを測る。土師器の壺が出土している。口径は口徑15.7cm、器高5.3cmを測る。高台は外側に付き、やや内傾する。

(2) ピット

第2遺構面で検出したピットは約170基で、直径は0.3～0.7m、深さ0.2～0.7mの範囲に収まる。柱根の残存する、直径の大きいピットもあったが、掘立柱建物を復元するには至らなかった。固化可能な遺物が出土しているピットを報告する。



fig.29 第2遺構面の遺構

SP219はI区南に位置する。砾石143が出土している。重量543.1g、比重2.33を測る。凝灰質砂岩と考えられる。

SP220はI区南に位置する。柱根132が残存している。直径10.8cm、残存長28.8cmを測る。下端部は削っている。

SP228はI区西端に位置する。土師器136が出土している。口径13.9cmを測り、底部はやや厚い。

SP235はI区西に位置する。土師器壺139が出土している。口径18.2cm、器高6.3cm、高台は厚く丸みをおびる。

SP238はI区西に位置する。土師器137・138が出土している。137は口径11.0cm、口縁部端部は「て」字状を呈する。138は口径13.0cm、器高3.7cmを測る。10世紀代のものと考えられる。

SP257はI区北に位置する。ウマの歯が出土している。接合不可能な破片に割れているため、点数は不明である。咬合面で観察できるエナメル製の形状からは左下顎臼歯であることがわかる。破片が小さく、法量計測は行なっていない。

SP265はI区北東に位置する。柱根131が残存している。直径14.6cm、残存長43.1cmを測る。

SP278はI区北西端に位置する。北側は調査区外へ拡がる。土師器壺142が出土している。口径15.1cm、器高21.5cm、球形の体部から外反する口縁部をもち、端部内面はやや凹む。外面は粗いハケ調整の後、ナデ調整を施す。古墳時代中期と考えられる。

SP290はI区中央に位置する。直径0.7mとやや大きい。土師器壺141が出土している。

SP2105はI区南に位置する。SK101に切られる。土師器皿133・134、黒色土器140が出土している。140は口径20.1cm、内面のみ黒色化するA類に相当する。外面はナデ調整である。10世紀代のものと考えられる。

SP2325はII区南東に位置する。土師器壺135が出土している。口径13.2cm、口縁部端部は内傾する。

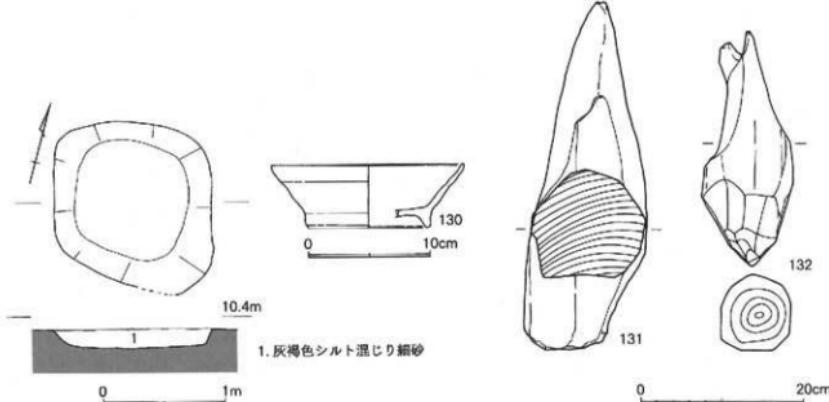


fig.30 SK202平面・断面図 出土遺物

fig.31 ピット出土遺物 (1)
(131:SP265 132:SP220)

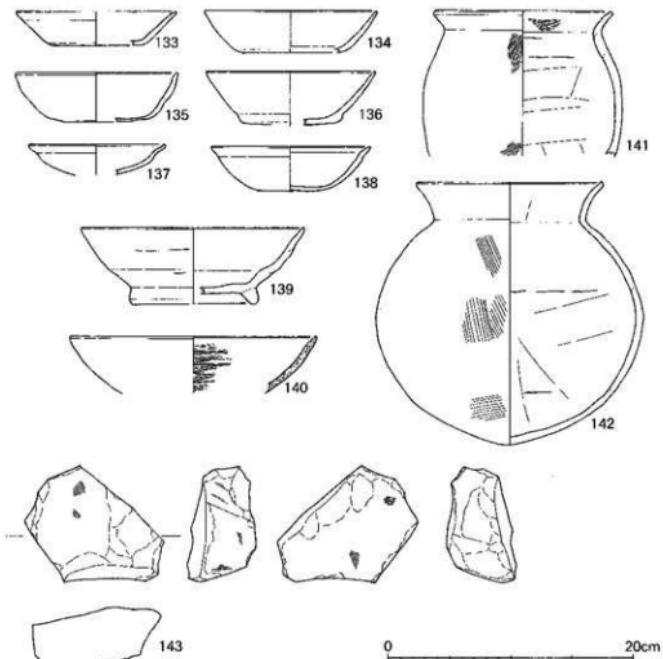


fig.32 ピット出土遺物（2）
 133・134・140：SP2105 135：SP2325 136：SP228
 137・138：SP238 139：SP235 141：SP290 142：SP278
 143：SP219

(3) 遺構に伴わない遺物

第2遺構面の遺物包含層である暗褐色砂混じりシルト、及び遺構検出中に出土した遺物は、遺構からの出土土と異なり、奈良時代のものが多く含まれていた。

144は欠損しているが、滑石製の円盤である。直径3.5cm、厚さ0.5cmを測る。重量5.33g、比重1.93を測る。

土師器皿145は口径13.0cm、器高3.1cm、土師器皿146は口径18.2cm、器高2.5cmを測る。どちらの皿も口縁部端部内面を幅狭く横方向のナデを施し、凹む。「寧なつくり」ではあるが、内面に暗文は見られず、内外面ともにナデ調整である。8世紀後半頃のものと考えられる。

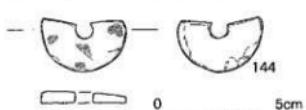


fig.33 遺構に伴わない遺物（1）

土師器塊148は口径13.8cm、器高5.2cm、口縁部端部をつまみ上げる。土師器壺149は口径18.1cm、器高4.3cm。土師器甕152は口径16.4cm、内外面は摩滅のため、調整が判明したのは頸部のハケ調整だけである。

須恵器蓋153は身受けのかえりがあり、頂部はケズリを施す。

須恵器蓋159は口径12.9cm、扁平な頂部に、屈曲し下方へ突出する短い縁部をもつ。須恵器坏161は口径12.1cm、器高3.4cm、坏162は口径12.8cm、器高3.5cm、坏163は口径15.9cm、器高4.0cmを測る。いずれも器高が低く、高台がやや内側に付く。底部の器壁が厚い。8世紀後半頃のものと考えられる。

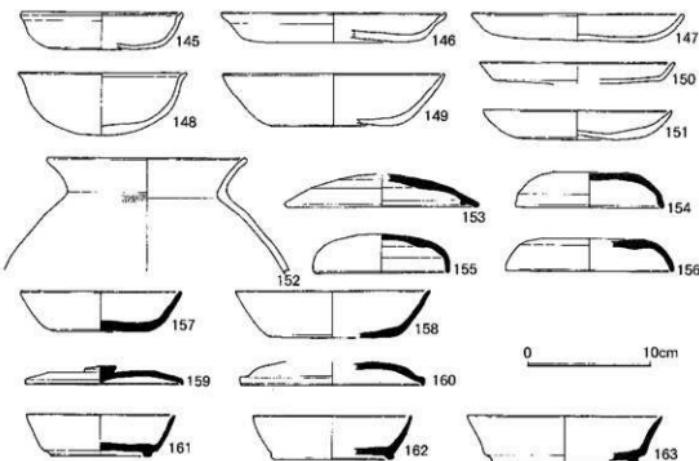


fig.34 遺構に伴わない遺物（2）

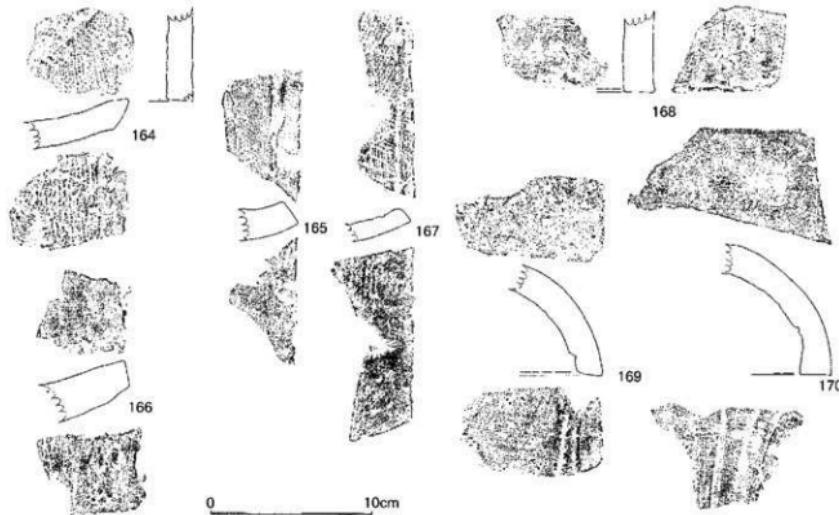


fig.35 遺構に伴わない遺物（3）

出土した瓦は上質のものが大半であるが、170は須恵質である。164～167は凸面に縄目痕、凹面には布目痕が残る。168・170の凸面には板押えの痕跡が残る。169の凹面は摩滅している。

171は鉄鏡である。約半分を欠損しており、復元される法量は直径8.0cm、器高は2.4cm、残存重量22.4gを測る。器形は浅い杯形で、底部より全体にゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁部にいたる。X線透過像による構造調査では、全体的に劣化が進行し、金属鉄の失われたようすが見て取れる。また金属顕微鏡で表面を観察したが、鋳造鉄や鍛造した上砂に覆われており、鋳造組織等は観察できなかった。また、器内には不定形の塊が付着しており、鋳造した有機物の可能性があるが、詳細は不明である。

172は平面形が「Y」字を呈する板状品である。横断面は平らな長方形を呈し、全体にやや反っている。用途は明らかでないが、あるいは雁脛式鉄鏡の可能性もある。残存長3.8cm、残存重量3.9gを測る。

173は鉄鏡と考えられる。平面形は上下に長い菱形に茎が付くものである。先端と茎を欠損しており、残存長5.6cm、残存重量7.2gを測る。

174は鉄釘である。断面方形の角釘で、上下端は欠損する。残存長は4.5cm、身部は一辺約7.9mmのほぼ正方形、残存重量は5.0gを測る。X線透過観察では折り返し鍛造の層構造が確認できる。

175は鉄釘である。断面方形の角釘で、上下端を欠損する。残存長は4.3cm、身部は一辺約1.2cmのほぼ正方形、残存重量は5.4gを測る。X線透過観察によれば、金属鉄はほぼ失われてしまっているが、折り返し鍛造の層構造が見える。

176は鉄製の環付き金具である。1本の鉄棒を二つ折にし、頂部に直径1.6cmの環を作り出しており、脚部は鍛接せずにヘアピン様の平面形を呈する。残存長は4.4cm、脚部の長さ2.6cm、残存重量4.2gを測る。

177は銅板であり、全体を縁部に覆われている。素材の成分分析は実施していない。全体にやや凸凹しており、復元すると直径約16.0cmの円筒形容器片の可能性がある。長径は7.1cm、厚さ3.9mm、残存重量47.0gを測る。X線透過による観察では、内部にスナーフィッシュは劣化による空隙が確認できる。

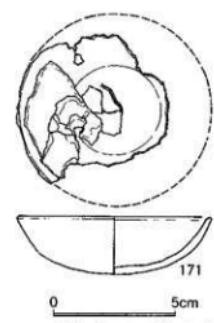


fig.36 遺構に伴わない遺物（4）

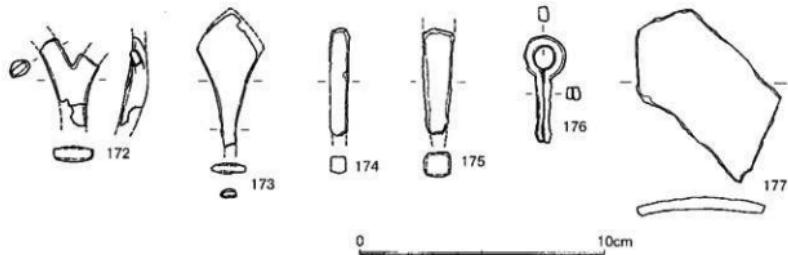


fig.37 遺構に伴わない遺物（5）

4. 第1造構面（中世）

溝2条、井戸1基、土坑3基、木棺墓1基、流路1条を検出している。造構は希薄で、遺物包含層の時期から、中世と考えられる造構面である。岡化可能な遺物が出土している造構を中心に報告する。

(1) 溝・流路

SD101

I区北に位置する、北東から南西方向に延びる溝である。南西側は調査区外へ延び、北東側はSR101に切られる。幅1.3m、深さ0.4mを測る。この溝は、現在に至るまで方位等が踏襲され、道などの境界として意識されつづけていたことから考えて、条里制地割りの坪境溝であった可能性が高い。埋土からは瓦器・青磁が出土しており、13世紀前半と考えられる。

瓦器塊178は口径14.0cmを測る。内面のヘラミガキは粗い。

青磁碗179は口径17.2cmを測る。外面に蓮弁文のある龍泉窯系青磁碗である。

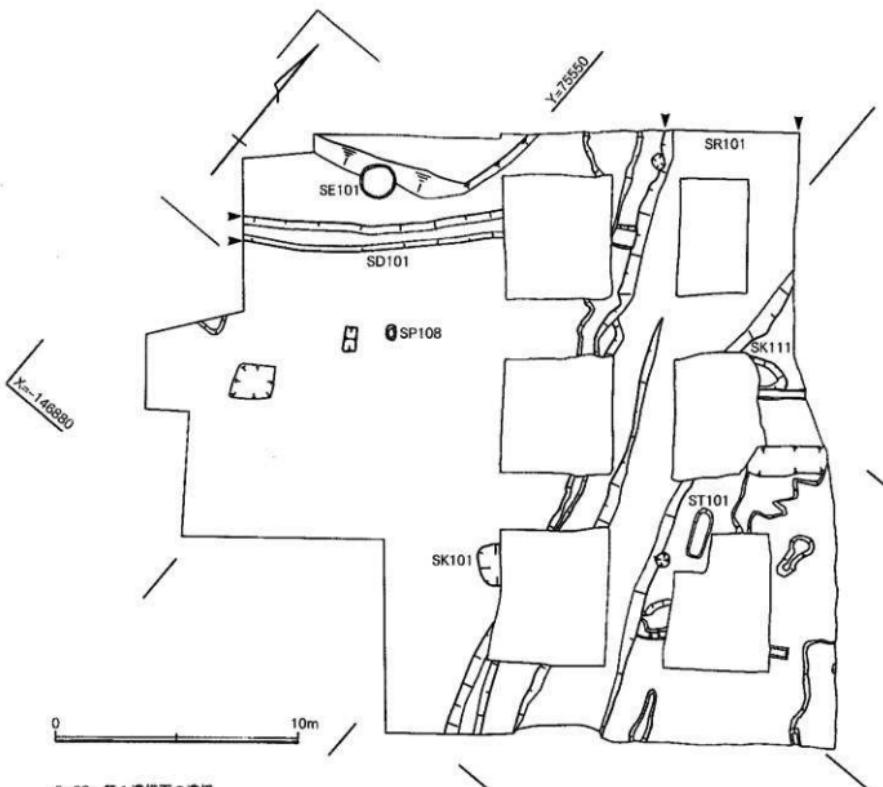


fig.38 第1造構面の造構

SR101

II区中央に位置する、南北方向の流路である。幅5.0m、深さ1.2mを測る。流路の護岸状の盛土内からは14世紀の遺物が出土しており、流路は少なくともこの時期には存在していたと考えられる。また埋土内からも同時期の須恵器・瓦器が出土している。しかし、最終埋土の堆積状況および出土遺物からは、近世に至るまで存在していたと考えられる。

須恵器塊181は口径16.8cm、底部に回転糸切り痕がある。瓦器塊182は口径15.2cm、器高4.1cmを測る。外面に粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る。183は口径15.3cm、器高5.2cmを測り、182に比べ高い。どちらの瓦器塊も形骸化した高台を貼り付ける。

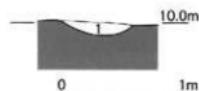
(2) 井戸・土坑

SE101

I区北に位置し、直径1.4m、深さ0.9mを測る。断面は急に立ち上がり、底面は平坦である。素掘りの井戸と考えられる。土器は細片のため図化できていない。

SK101

I区南に位置する、直径1.9m、深さ0.6mを測る土坑である。北側は調査範囲外へ拡がる。瓦器塊が出土している。184は口径12.5cm、器高3.1cmと浅く、形骸化した高台を貼り付ける。内面は粗くヘラミガキを施す。



1. 淡灰色シルト
fig.39 SD101断面図

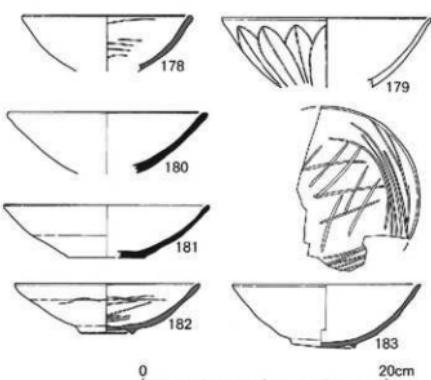
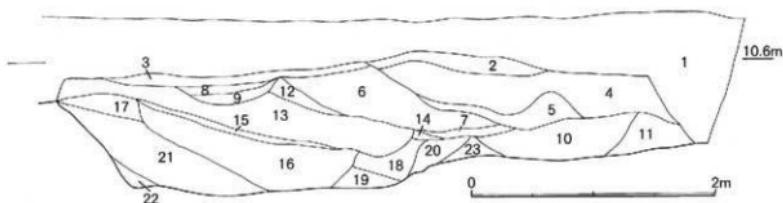


fig.40 SD101・SR101出土遺物 (178・179: SD101 180～183: SR101)



1. 盛土・擾乱 2. 黄灰色砂混じりシルト 3. 緩黄色シルト混じり細砂 4. 淡黄色砂礫 5. 緩灰色シルト 6. 青灰色細砂混じりシルト 7. 明青灰色シルト混じり細砂 8. 淡青灰色シルト混じり細砂 9. 灰色細砂混じりシルト 10. 灰色砂礫 11. 褐褐色シルト 12. 淡褐色シルト混じり細砂 13. 淡青灰色砂礫 14. 灰色細砂 15. 青灰色細砂 16. 黄灰褐色砂礫 17. 明灰色細砂混じりシルト 18. 暗灰褐色シルト 19. 青灰色粗砂 20. 明青灰色極細砂 21. 黑灰色シルト 22. 淡黃灰色細砂 23. 青灰色砂礫混じり細砂

fig.41 SR101断面図

SK111

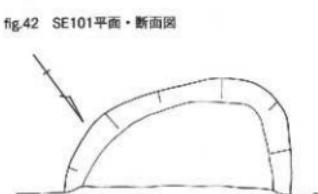
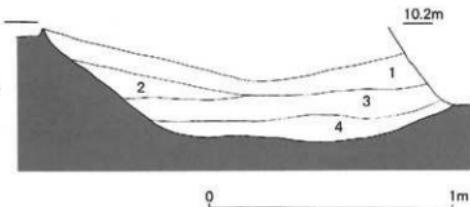
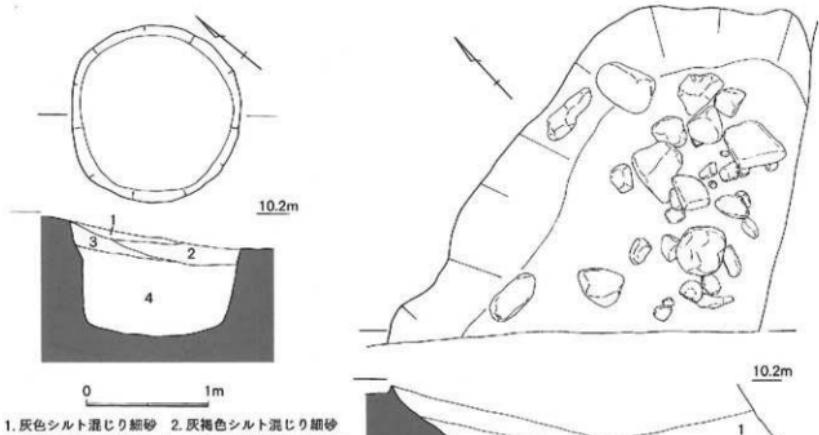
II区北東に位置する土坑である。擾乱により上層を削平されているが、深さ0.45mを測る。南側は調査範囲外へ抵がる。断面は緩やかなU字状を呈し、底面は平坦である。直径0.1~0.3mの礫が底面に広がる。瓦器皿が出土している。

185は口径8.9cm、器高2.3cm、内面のヘラミガキは摩滅によって明瞭でない。

(3) 木棺墓

ST101

II区中央に位置する。掘形は長さ2.1m、幅0.71m、深さ0.3mを測る。木棺の規模は長さ1.68m、北の幅0.48m、南の幅0.42m、深さ0.2mを測る。棺の北小口付近から土師器皿・塊がまとまって出土している。出土状況から、棺上に置かれていたものが棺の腐食と共に崩落したものと考えられる。棺材は、木棺の蓋、棺の側板、底板の一部が確認できた。また、棺の底板を補強するように、桟木状の木材が横方向に使用されていた。棺の形状及び土器の出土状況から、頭位は北と考えられる。



1. 灰色シルト混じり細砂

fig.43 SK101平面・断面図

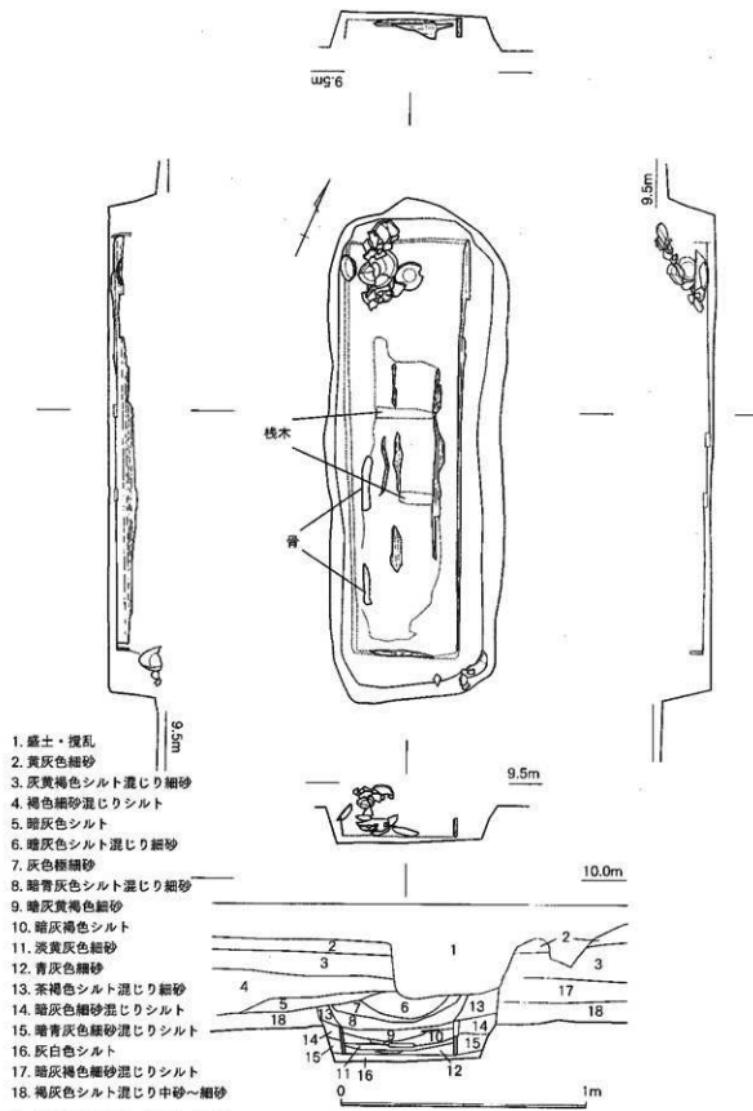


fig.46 ST101 平面・断面・立面図

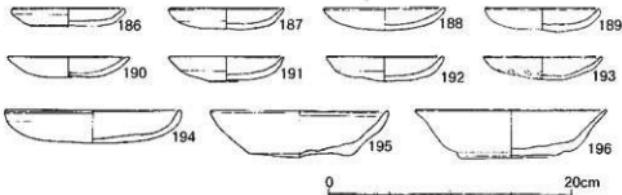


fig.47 ST101出土遺物

なお、大脛骨下肢骨の一部と思われるものを棺の南半にて確認しているが、脆弱な状態であったため、取り上げはできていない。時期は12世紀前半と考えられる。土師器以外の土器は出土していない。

土師器皿は8枚出土している。いずれも内外面ともにナデ調整を施す。

土師器塊は3枚出土している。194は口径14.3cm、器高2.7cmを測る。195は底部に回転系切り痕がある。196はやや粗雑なつくりである。いずれの土師器も摩滅が著しい。

(4) 造構に伴わない遺物

第1造構面の遺物包含層である灰色砂混じりシルト、黄灰色シルト、明灰色砂混じりシルト、及び造構検出中に出土した遺物には土師器・須恵器・瓦器がある。

土師器皿200、須恵器皿201は底部に回転系切り痕がある。

須恵器塊203・204は底部に回転系切り痕がある束縛系須恵器である。203は口径17.1cm、器高5.4cm、204は口径14.6cm、器高4.7cmを測る。

205は欠損しているが、土師質の土錐である。孔径0.5cmを測る。

206は鉄製の角釘である。両端は欠損しており、残存長11.6cm、断面は一辺9.7mmのほぼ正方形を呈する。

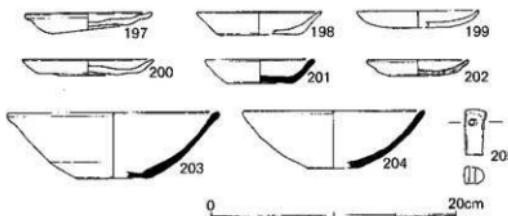


fig.48 造構に伴わない遺物（1）

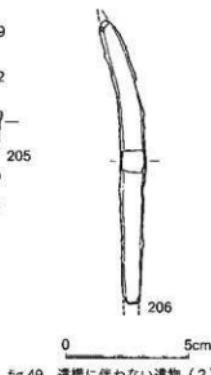


fig.49 造構に伴わない遺物（2）

5. 生産関連遺物

鉱滓は、鉱石より金属を抽出する際、または原材料から不純物を取り除く工程において生じる副産物、ないしは生産物そのものであり、その時代の金属製品生産の物証ともいえる遺物である。しかし、鉱滓そのものが原材料として流通する例、また葬送儀礼に伴って墳墓に副葬される例もあり、鉱滓の存在のみによって、そこで生産行為がおこなわれていたという積極的な証左とは成り得ない。今回の発掘調査では関連遺構は検出されなかったが、遺物には、鉱滓8点、鉄塊系遺物2点、炉壁3点等がある。鉱滓の分析には断面観察、EPMA分析など様々なアプローチがなされているが、今回は理化学的分析手法を用いず、表面観察とX線透過観察のみを実施した。

[表面観察]

210・211は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に属するSD301より出土している。210は全体が土砂を取り込んだ滓に覆われているため、金属由来の組織を観察することは困難であるが、形状は下面が椀状を呈する椀形滓である。部分的に非晶質の鎌形化鉄が観察でき、着磁性も強いことから、内部に金属鉄を相当量含有しているものと考えられる。

211は焼き締められた粘土鉱物を素材とする炉壁の表面に、厚さ7mm前後にわたって鉱滓が付着している炉内残留滓である。鉱滓部分は灰色(7.5Y4/1)を呈し、表面は凹凸が顕著である。落射光での顕微鏡観察では針状結晶と粒状結晶の密集する状況が看取できる。これは鎌鉄素材に見られる、レーデブライ特徴が形成されているものと考えられる(fig.51)。着磁性が強く、内部に金属鉄を含有している可能性がある。

212は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の柱穴(SP374)より出土している。上面が半坦で底部が椀形を呈する椀形滓である。着磁性は強く、部分的に露出した、灰色(7.5Y4/1)を呈する滓を落射光で観察すると、微細な粒状結晶が縦横に規則的に配列する組織がみられた。これはレーデブライ特徴であると考えられる(fig.50)。また、これら組織間の空隙部分には浅黄色の非晶質結晶が介在しているが、理化学的分析を実施しておらず、詳細は不明である。

209は古墳時代中期～平安時代の柱穴(SP257)出土の椀形滓であり、表面の大部分が土砂を取り込んだ滓に覆われる。着磁性は弱く、暗灰色(N3/0)を呈する滓表面の顕微鏡観察では、かなりボーラスな状況が観察できる。また、針状結晶が顕著に観察される部分があり、レーデブライ特徴が形成されているものと考えられる。

208・213・216は古墳時代中期～平安時代の包含層(暗褐色シルト)より出土している。208は椀形滓である。底面は椀底状で側面に立ち上がり面を持ち、上面は半坦で、部分的に凸部を持つ。全面に土壌成分、土器片などが溶着しており、着磁性は認められない。鉱滓部分は表面がオリーブ黒色(7.5Y3/2)を、破断面は黒色(10Y2/1)を呈する。内部はボーラスで、角ばった微細結晶が顕微鏡下で観察できる。

213は表面が灰色(7.5Y4/1)を呈する椀形滓で、粘土鉱物が表層を覆う。破断面を観察すると非常にボーラスで、ミクロ組織は微細な粒状結晶がレーデブライ特徴を形成していることが認められた。弱いながら着磁性がある。

216は周囲を厚さ5mm前後の土壌を取り込んだ滓に覆われており、内部に暗赤褐色(2.5YR3/3)を呈し、強い着磁性を持つ、鉄由来と考えられる物質が塊状に存在する。塊の表面には、橙色(5YR7/8)を呈する層が薄く存在している。X線透過観察では、比較的均質な内部構造を持つことが観察でき、微細なクラックが生じている。これは鉄分を多く含んだ原料素材、いわゆる鉄塊系遺物と考えられる。

217・207・214は古墳時代中期～平安時代の包含層(暗灰色砂質シルト)より出土している。217も216と類似する鉄塊系遺物の可能性がある。厚さ約4mmの板状を呈する塊の周囲には、非品質の錆化鉄と土壌成分が付着している。塊の断面は黒褐色(10YR3/2)を呈し、断面を顕微鏡観察すると、マクロな針状組織が縱横に走り、空隙が多い状況が観察された。これは銹化によって鉄分が流失し、針状結晶のみが残存してきた空隙の可能性がある。また表層は褐色(7.5YR4/6)を呈し、極めて微細な錆化鉄の結晶を形成している。着磁性は強い。

207は全体的に凹凸が顕著で、ボーラスである。礫、土器片などを多く含み、着磁性は弱い。表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。破断面は灰色(N4/0)を呈し、顕微鏡観察ではやや角のある結晶が密集する様子が認められた。

214は卵形を呈する鉢滓である。着磁性は強く、灰色(10Y4/1)の表面は比較的滑らかながら、所々に気泡を認めることができる。顕微鏡観察では、巨大な針状組織と微細な粒状組織が共存するレーデブライト組織が認められる。

218は古墳時代中期～平安時代包含層出土の炉壁材の破片である。内部はガラス化しており、気泡が目立つ。表面は酸化し、暗赤色(10R3/4)を呈する。着磁性はない。

215は中世包含層(灰色砂混シルト)出土の楕円形滓破片であり、厚く重量感がある。着磁性は弱い。全体にボーラスで、鉄滓部分はオリーブ黒色(7.5Y3/2)を呈する。また外表の大部分は、黄褐色(10YR5/8)の錆化鉄を含む土砂が付着している。ミクロ組織は微細な針状結晶と粒状結晶がレーデブライト組織を構成する。

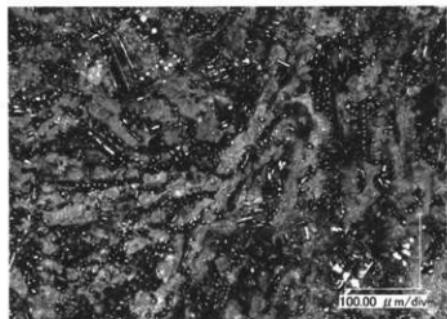


fig.50 金属組織顕微鏡写真(1)

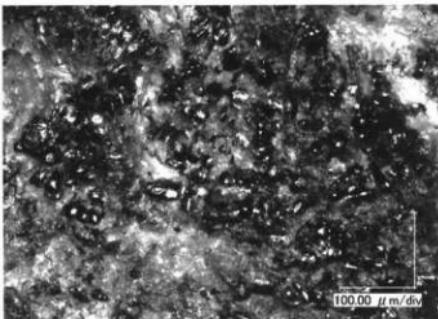


fig.51 金属組織顕微鏡写真(2)

No	遺物名	出土層位	時期	長辺×短辺×厚(cm)	重量	着磁性
210	楕形溝	SD301	弥生時代後期～古墳時代前期初頭	4.0×3.3×2.0	26.8 g	強い
211	炉壁・炉内滓	SD301	弥生時代後期～古墳時代前期初頭	4.0×2.1×2.0	17.1 g	強い
212	楕形溝	SP374	弥生時代後期～古墳時代前期初頭	2.9×2.5×2.1	15.1 g	強い
209	楕形溝	SP257	古墳時代中期～平安時代	5.6×4.6×2.6	72.4 g	弱い
208	楕形溝	暗褐色シルト	古墳時代中期～平安時代	6.4×4.9×2.4	81.6 g	なし
213	楕形溝	暗褐色シルト	古墳時代中期～平安時代	2.6×2.5×1.5	12.0 g	弱い
216	鉄塊系遺物	暗褐色シルト	古墳時代中期～平安時代	5.3×3.6×2.1	32.3 g	強い
217	鉄塊系遺物	暗灰色砂質シルト	古墳時代中期～平安時代	3.2×2.8×1.5	10.9 g	強い
207	楕形溝	暗灰色砂混シルト	古墳時代中期～平安時代	6.9×4.7×2.8	79.0 g	強い
214	楕形溝	暗灰色砂混シルト	古墳時代中期～平安時代	2.3×2.1×1.8	12.2 g	強い
218	炉壁	暗褐色砂混シルト	古墳時代中期～平安時代	4.2×2.9×2.0	12.1 g	なし
215	楕形溝	灰色砂混シルト	中世	4.5×3.7×3.1	77.1 g	弱い

表3. 生産関連遺物計測表

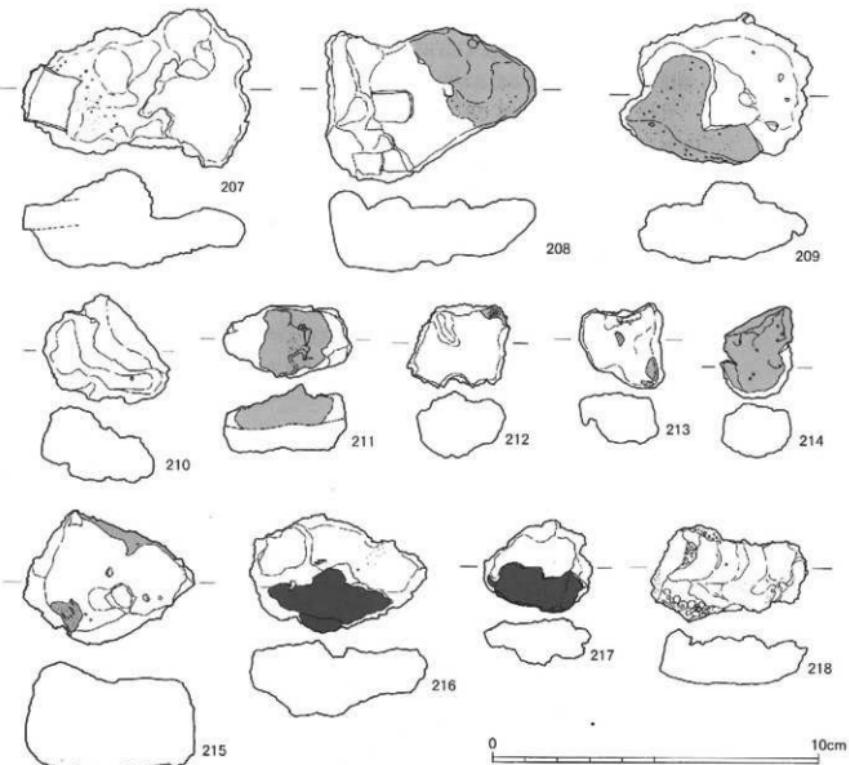


fig.52 生産関連遺物

〔X線透過観察〕

X線透過画像の観察からは、3タイプの内部構造が存在することを確認した。

- ①鉱 淬 全体にポーラス。鉄由来の組織を持ち、比較的X線の吸収率が高い。
・・・・・ (207~215)
- ②鉄塊系遺物 内部は均質でクラックが見える。鉄分が多く内包され、X線の吸収は比較的強い。・・・ (216~217)
- ③炉 壁 内部構造はポーラス。粘土鉱物で構成されるため、X線透過率が高い。・・・・・ (218)

〔まとめ〕

以上の結果から、これらの遺物は鉄製品の生産に関連する可能性が高い。

断面観察および理化学的分析を実施していないため断定はできないが、顕微鏡観察されたレーデブライト組織のうち、針状結晶はファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) であり、粒状結晶はウスタイト (FeO) と推定される。これらを晶出する鉄滓は精錬→鍛錬鍛冶に伴う滓に顕著であるため、鍛造がおこなわれていた可能性が示唆される。ただし、遺跡周辺に精錬炉・鍛冶炉などの遺構が未発見であることから、操業されていた場所の特定は困難である。

今回所見を提示した遺物には、弥生時代後期末～古墳時代初頭にまでさかのぼる可能性があるものが含まれている。列島内において当該時期にまでさかのぼる鉄製錬は確認されていないが、精錬・鍛錬関連遺物は北部九州から関東にかけて、弥生時代前期～古墳時代前期にさかのぼる出土例が散在している。したがって、神戸において同様の遺物が存在しても不思議はないとはいえ、鉄器生産導入期前後の生産関連遺物が当地で出土した意味は大きい。今後、操業の位置情報を確定し得る遺構が発見されれば、さらに古代工業技術の解明に寄与できるであろう。

II. 参考文献

(土器)

黒田恭正 「第4章 考察」『森南町遺跡発掘調査報告書 第1・2次調査』神戸市教育委員会 2005

(動物遺存体)

西中川駿 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書 1991

松井章輔 「第4章 牛馬骨骼回顧」『動物考古学の手引き』2001-2005年度独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター中期計画成果報告書 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2006

(大型植物遺体)

新山雅広 「4.小路大町から出土した大型植物化石」『小路大町遺跡第4次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003



fig.53 生産関連遺物写真

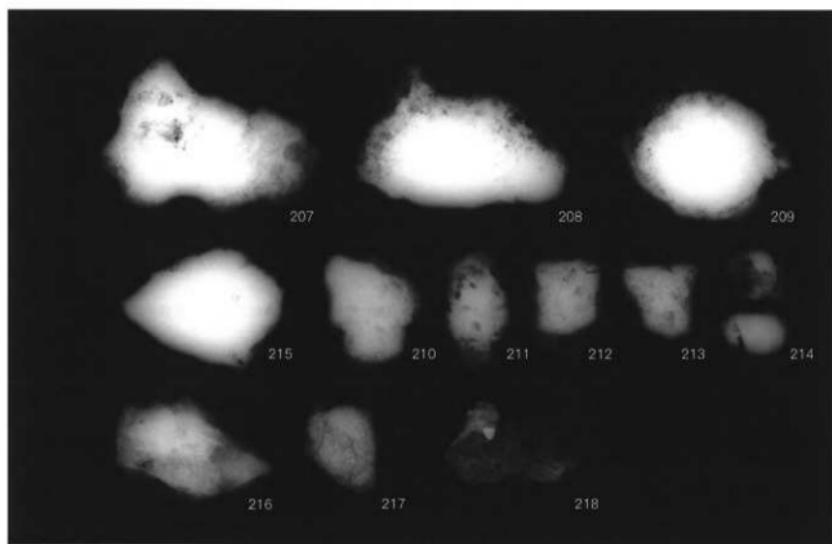


fig.54 同上X線透過画像

III. 出土木製品の樹種同定調査

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

兵庫県神戸市に位置する上沢遺跡の第55次調査で出土した木製品のうち、11点の樹種同定結果を報告する。上沢遺跡は会下山による小丘陵裾部に形成された扇状地に立地し、縄文時代晩期～中世にかけて集落として機能していた。

今回は、弥生時代後期～古墳時代前期の柱根、古墳時代中期～平安時代の柱根、中世の柱根と木棺の樹種を検討した。また同定にあたり、森林総合研究所の能城修一氏の御教示を得た。

2. 試料と方法

同定試料のプレパラートは、神戸市教育委員会が採取した木材ブロックより切片を作成した。切片は片刃剃刀を用いて、横断面(木口)、縦断面(桿口)、放射断面(板口)の3断面を採取し、ガムクローラルで永久封入した。同定はこれらのプレパラートを光学顕微鏡下で40～400倍で検鏡し、現世標本と対照して同定を行った。なお、プレパラートは神戸市教育委員会で保管している。

3. 結果

同定結果を表4に、また表5に一覧を示す。

同定の結果、針葉樹のアスナロ、マツ属、ツガ属、コウヤマキ、カヤ、の5分類群が同定された。このほかに材の保存が悪く、科以下の同定が出来なかったものを針葉樹とした。本遺跡ではアスナロとコウヤマキがともに3点ずつ、カヤが2点、ツガ属とマツ属が1点、針葉樹が1点ずつ検出された。弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～平安時代の柱根としてマツ属、ツガ属、コウヤマキ、カヤが使用され、中世の柱にはカヤ、木棺にはアスナロが使用されていた。

以下に材組織の特徴や図版に1分類群1点の光学顕微鏡写真を示し、同定の根拠とする。そのほか、生態・分布・材質を記載する。

(1) アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 fig.55 1a-1c(No.10)

仮道管および放射柔細胞、樹脂細胞によって構成される針葉樹である。晩材は量が少ない。分野壁孔は小型のヒノキ型～スギ型で、1分野に2～4個存在する。放射組織に樹脂が多い。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工には比較的容易である。

(2) マツ属 *Pinus* マツ科 fig.55 2a-2c(No.5)

仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞、放射柔細胞および放射仮道管によって構成される針葉樹材である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射柔細胞の分野壁孔は

樹種	弥生～古墳 柱根	古墳～平安 柱根	中世			合計
			柱根	木棺蓋板	木棺底板	
アスナロ				1	1	3
マツ属		1				1
ツガ属		1				1
コウヤマキ	1	2				3
カヤ	1		1			2
針葉樹	1					1
合計	3	4	1	1	1	11

表4. 出土製品の樹種同定結果

窓状となる。放射仮道管の内壁が明確に確認することができず、本同定では複維管束亜属か単維管束亜属は判断がつかず、マツ属にとどめた。

(3) ツガ属 *Tsuga* マツ科 fig.55 3a-3c(No.7)

仮道管および放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は明瞭。放射柔細胞は厚く、数珠状末端壁となる。放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で小さく、1分野に1~4個存在する。

ツガ属は、温帯に分布するツガと亜高山帯に生えるコメツガがある。材の性質は似ており、比較的重硬で、早材部から晩材部への移行が急であるため、切削はあまり容易ではないが、水湿に耐える。

(4) コウヤマキ *Sciadopitii vsericillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 fig.55 4a-4c(No.1)

仮道管と放射柔細胞によって構成される針葉樹である。早材から晩材の移行は比較的緩やかで、晩材の幅は狭い。分野壁孔は窓状で、1分野に1~2個存在する。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹である。また日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で水湿に耐朽性がある。

(5) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科 fig.55 5a-5c(No.3)

仮道管および放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。放射組織は1~20細胞高になり、すべて放射柔細胞によって構成される。分野壁孔は小型のヒノキ型で1分野に1~4個存在する。仮道管にはらせん肥厚が認められ、2本の対になる傾向がある。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で彈力性に富み、切削等の加工は容易で水湿によく耐える。

(6) 鈴葉樹 *Couifer* fig.55 6a(No.2)

仮道管及び放射柔細胞、樹脂細胞によって構成される針葉樹であるが、材組織の保存が悪く、分野壁孔等を明確に確認することができなかった。そのため、科以下の同定ができなかった。

4. 考察

今回の同定では、弥生時代後期~古墳時代前期、古墳時代中期~平安時代にかけての柱根材の用材として、コウヤマキが使用されていた。本遺跡でコウヤマキが使用されていたのは、上沢遺跡に接し、古代寺院跡と推定されている室内遺跡の存在や、上沢遺跡内に奈良時代に官衙があったと想定されていることなどが関係していると推察される。また中世の木棺には、いずれもアスナロが使用されていた。アスナロは軽軟で割裂性が良いため、利用が行われていたと推察される。

サンプル名	台帳No.	遺物名	出土地区	出土遺構	時期	樹種	報告書掲載 No.
1	R-559	柱根	I 区	SP3103	弥生時代後期~古墳時代前期	コウヤマキ	115
2	R-537	柱根	I 区	SP3131	弥生時代後期~古墳時代前期	針葉樹	
3	R-609	柱根	I 区	SP3156	弥生時代後期~古墳時代前期	カヤ	
4	R-284	柱根	I 区	SP265	古墳時代中期~平安時代	コウヤマキ	131
5	R-306	柱根	I 区	SP2111	古墳時代中期~平安時代	マツ属	
6	R-283	柱根	I 区	SP2149	古墳時代中期~平安時代	コウヤマキ	
7	R-614	柱根	I 区	SP220	古墳時代中期~平安時代	ツガ属	132
8	R-305	柱根	I 区	SP108	中世	カヤ	
9	R-712	木棺蓋板	II 区	ST101	中世	アスナロ	
10	R-766	木棺底板	II 区	ST101	中世	アスナロ	
11	R-768	木棺側板	II 区	ST101	中世	アスナロ	

表 5. 出土製品樹種同定結果一覧

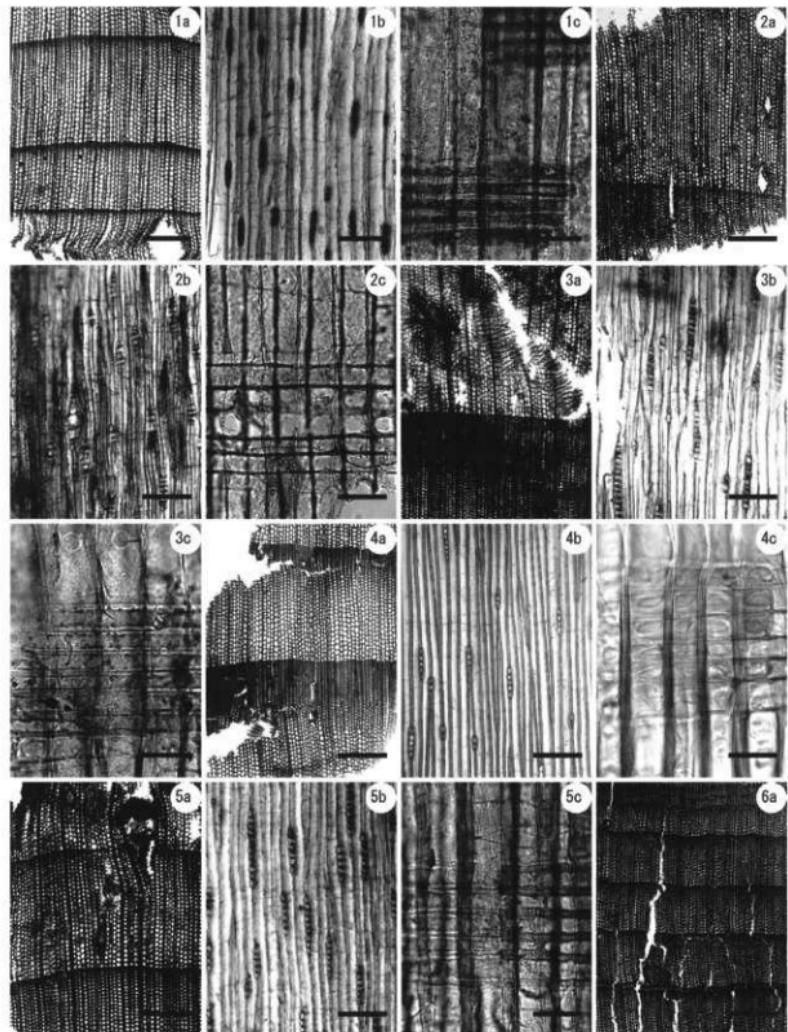


fig.55 出土木材組織の光学顕微鏡写真

a : 横断面 (スケール $200 \mu\text{m}$) b : 放射線断面 (スケール $=100 \mu\text{m}$) c : 接線断面 (スケール $=25 \mu\text{m}$)

1a-1c. アスナロ (No. 10) 2a-2c. マツ属 (No. 5) 3a-3c. ツガ属 (No.) 4a-4c. コウヤマキ (No. 1)

5a-5c. カヤ (No. 3) 6a. 針葉樹 (No. 2)

IV. まとめ

今回の調査では第1遺構面（中世）、第2遺構面（古墳時代中期～平安時代前半頃）、第3遺構面（弥生時代後期～古墳時代前期）の遺構と遺物を確認することができた。

出土した遺物の大半は、SD301から出土した弥生時代後期～古墳時代前期初頭（庄内期）の土器である。北から南東方向へ弧を描くこの溝の、特に上層から出土した土器には完形の壺が多く含まれていた。

上沢遺跡内ではこの時期の溝から同様に完形品を含む大量の土器が出土している例があるので、その出土状況・器種構成について比較してみたい。

第4次調査の第2調査区のSD01は、南側第19次調査の竪穴住居を取り巻く、断面逆台形状を呈する溝である。この溝からは壺が最も多いものの、壺・甕・高杯・鉢と多様な器種が出土しており、完形品が多く含まれる。また、第3調査区のSD205は南北方向の溝で、幅3.0mと他の溝に比べやや幅広いが、ミニチュアの壺等が大量に出土しており、調査担当者は投棄されたものと考えている。

第28次調査では3条のほぼ並行して弧を描く溝（SD204・202・203）が竪穴住居の西側をめぐる。SD202の最下層では壺の完形品が出土しており、SD203からもまとまって土器が出土している。

第51次調査では竪穴住居と切り合っている南北方向の溝（SD01）から壺を中心とした土器が口縁部を南にむけて一列で出土している。投棄されたというより据え置かれた可能性が高いと調査担当者は考えている。

これらの3例はいずれも竪穴住居付近の溝から出土しているという共通点がある。そのため、今回調査のSD301についても、南側の第4次調査地の溝へと弧を描く様に続くことから、先の3例と同様であれば、未調査地に竪穴住居が存在する可能性が考えられる。これまでに検出された住居は竪穴住居8棟、掘立柱建物2棟と意外に少ないが、土器が大量に出土する溝の付近に竪穴住居が存在すると仮定できるならば、今後の調査によって検出数が増加する可能性が考えられる。

溝から大量の土器が出土する例をとりあげてきた。上沢遺跡ではこの時期を境に遺構・遺物が減少していることから、集落を移動する際、それまでおそらく排水目的等で使用してきた溝に土器を投棄した可能性が考えられる。その際に完形の土器を据え置き、なんらかの祭祀的な行為がなされた可能性も否定はできないが、今回証明できるものはなかった。

これまでの調査から庄内期の遺構を抽出してきた。調査地に偏りがあるものの、西半部では同時期の遺構をほとんど確認していないことがわかる。第30次調査においてはこの時期、湿地であることが判明していることからも、居住に適さない区域だったと考えられる。第20次調査では杭列を伴う南北方向の流路（SD501）を検出し、埋土の状態から滞水していた可能性が考えられている。また、遺跡の東端にあたる第28・35次調査についても等高線に沿って流路が2条検出されており、谷筋であったと考えられる。北側については、松本通8丁目の調査において住居等は確認されておらず、東西方向の流路が見つかっている。

のことからも、この時期の居住域は上沢通8丁目南半部を中心とした南北120m、東

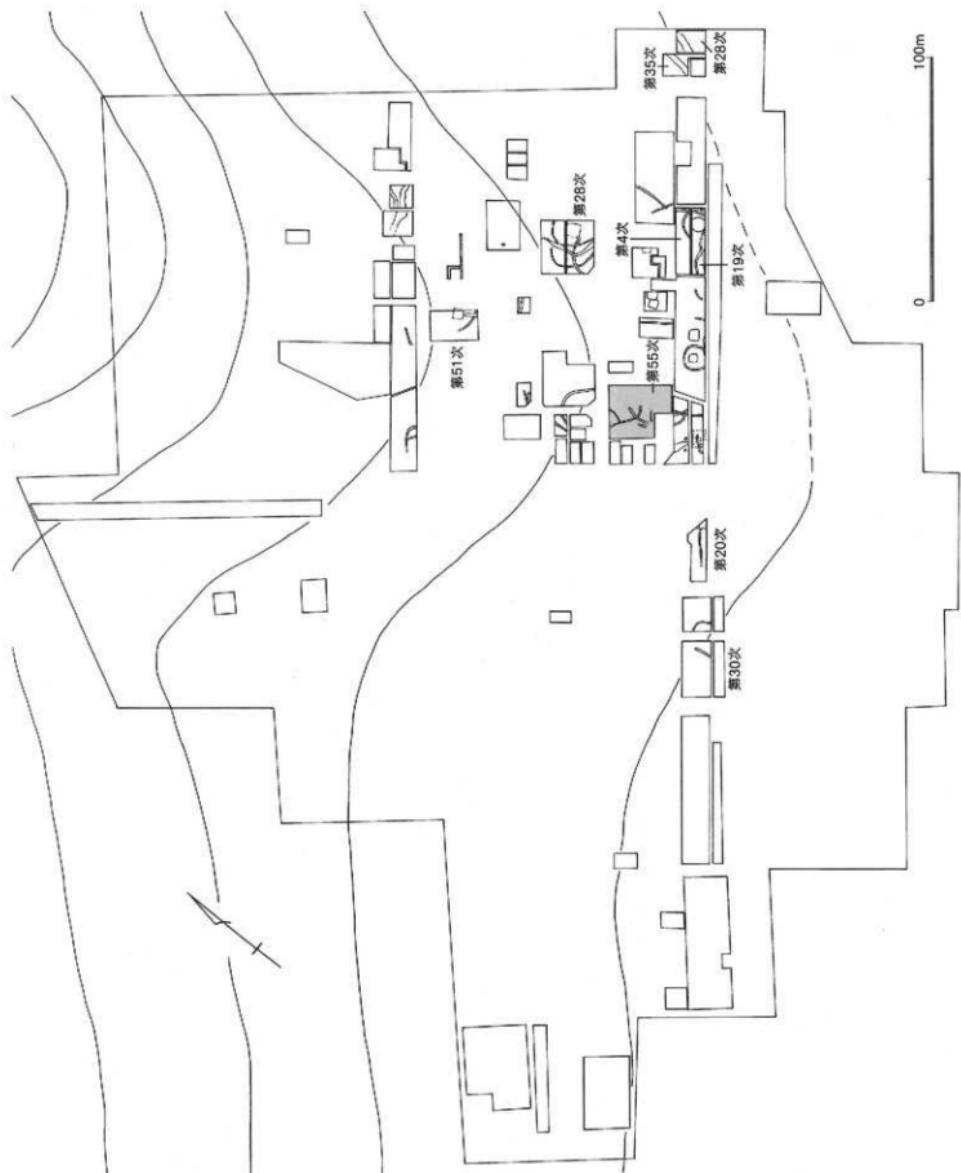


fig.56 庄内期の主な遺構

西150mの範囲と考えられる。なお、南側についての広がりは、未調査地が大半であるため不明であるものの、等高線や流路の方向から考えると、南へは広がらない可能性が高い。

上沢遺跡は調査例は多いものの、部分的な報告しかできていない遺跡のひとつである。今回報告した資料が広く活用され、地域の歴史解明に寄与できれば、望外の幸せである。

IV.参考文献

斎木巖他「上沢遺跡第3次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999

斎木巖他「上沢遺跡第28次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001

黒田恭正「上沢遺跡第51次調査」「平成14年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2005

写 真 図 版





第3遺構面全景（東から）

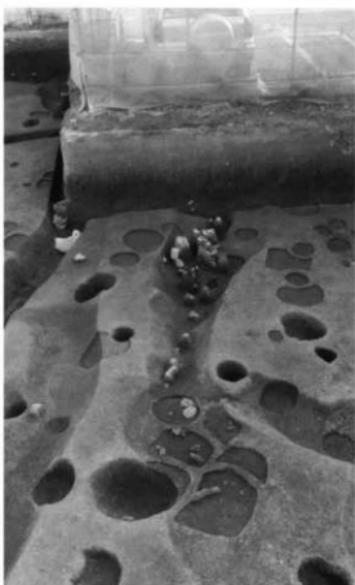


第3遺構面全景（北から）

図版2



SD301遺物出土状況（北から）



SD306遺物出土状況（北から）



SD301・310（東から）



第2透構面全景（東から）

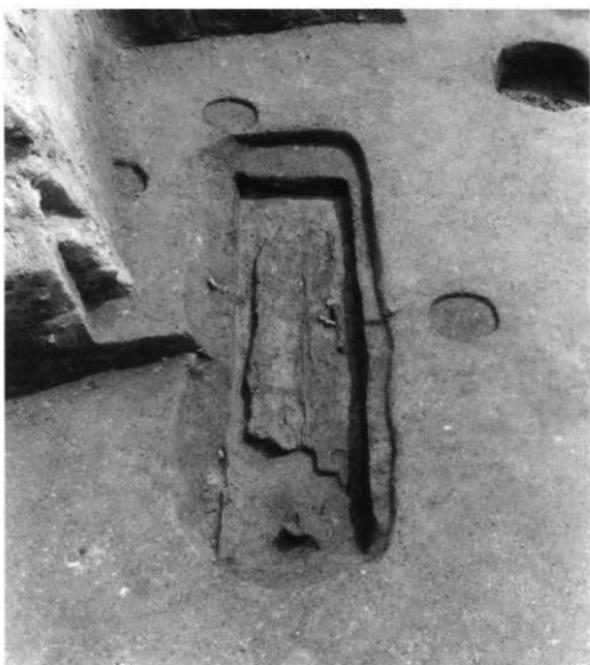


第1透構面全景（南から）

図版4



ST101遺物出土状況（東から）



ST101構底状況（北から）



SD301出土遺物（1）

図版6



4



61



17



13



18



9



20



25



22



26



24



28

図版8



27



36



32



37



33



38



39



40



41



44



43



46

図版10



42



48



45



49



47



50



53



57

55



58

図版12



59



60



63



65



66



67



68



73



71



74

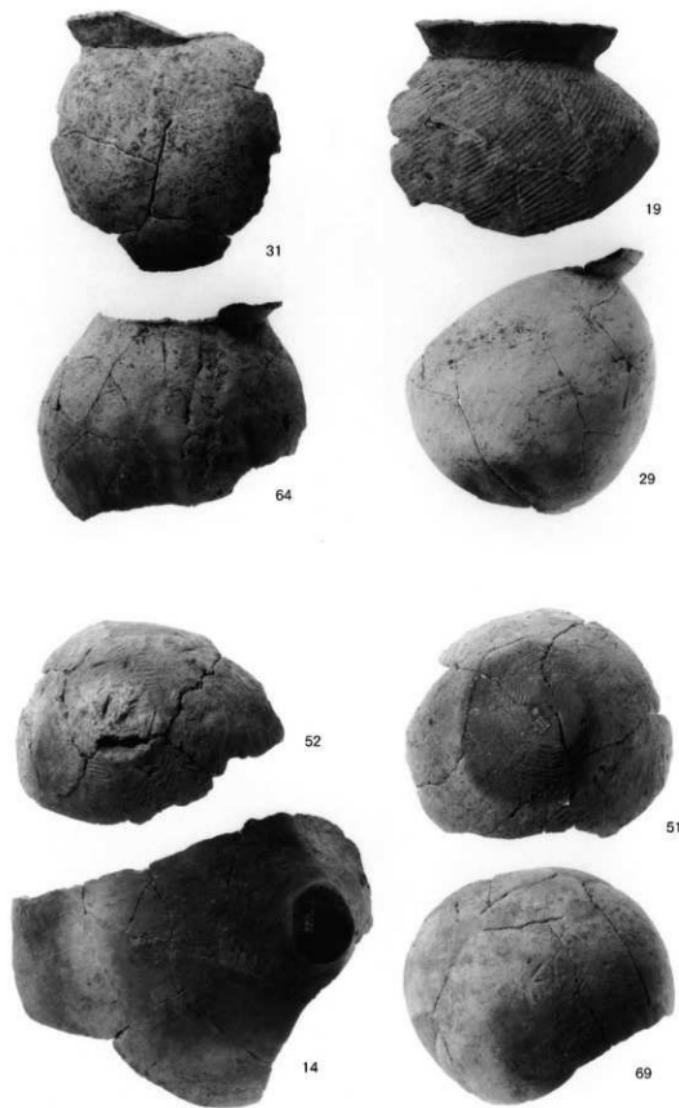


72



75

図版14



SD301出土遺物 (10)



79



76



80



78



83



82



84

図版16



85



89



87



90



88



91

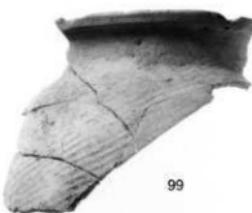


92



94

SD302出土遺物



99



98



95

SD304出土遺物



96

SD306出土遺物



100

SD307出土遺物（1）

図版18



102



103



104



106



105

SD307出土遺物（2）



110

SK306出土遺物



109

SK304出土遺物



113

SP3171出土遺物



121

117



122

118



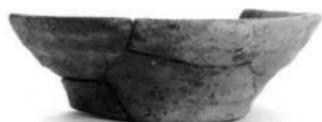
124

119



125

図版20



130

SK202出土遺物



143



134

SP219出土遺物



133



140

SP2105出土遺物



131



115



135

SP2325出土遺物



132

SP3103・SP265・SP220 出土柱材



144



144

第2遺構面 遺構に伴わない遺物（1）



145



148



146



149



147



159



151



157

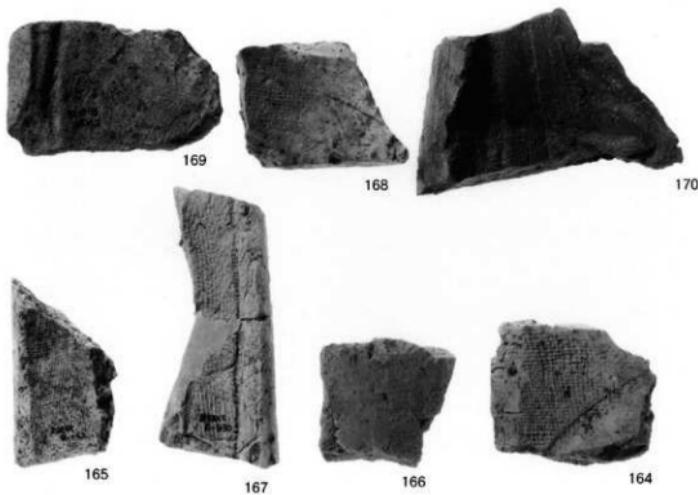
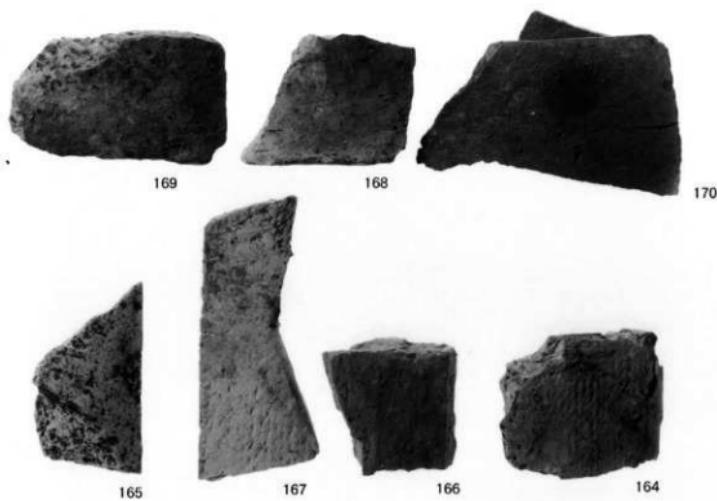


152



158

図版22



第2遺構面 遺構に伴わない遺物（3）



186



192



187



193



188



194



189



195



190



196

図版24



179

SD101出土遺物



182

SR101出土遺物



184

SK101出土遺物



185

SK111出土遺物



197



202

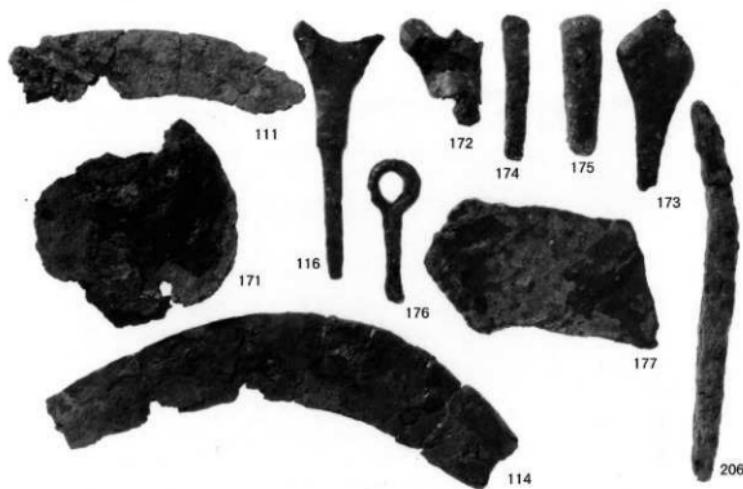


201

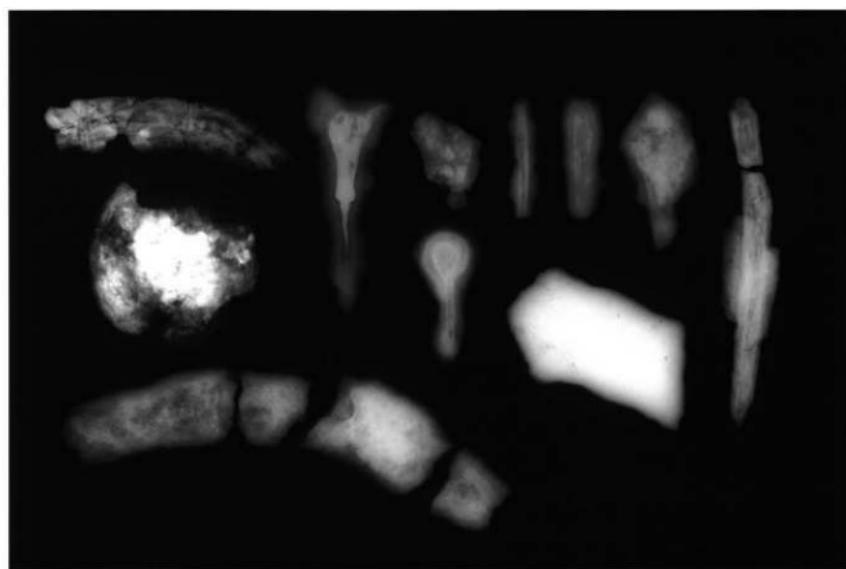
第1造塊面 造構に伴わない遺物



SP257・SD302出土動植物遺存体



金属製品



同上X線透視画像

報告書抄録

ふりがな	かみさわいせき だい55じちょうさ はくつちょうさほうこくしょ							
書名	上沢遺跡 第55次調査 発掘調査報告書							
編著者名	小林さやか（編） 中村大介							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480							
発行年月日	西暦2009年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面 積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上沢遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区上沢通 8丁目102-4	28105	4-31	34° 40' 24"	135° 9' 28"	20080107 ～20080326	500	共同住宅 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上沢遺跡	集落	弥生時代後期 ～中世	弥生時代後期末 ～古墳時代前期初頭 溝・土坑・ピット 中世 井戸・土坑・木棺墓	弥生時代後期末 ～古墳時代前期初頭 弥生土器・石製品 古墳時代～中世 土師器・須恵器・石製品				
要 約	弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～平安時代前半、中世の3面の遺構面と遺物を確認した。遺物の大半は、溝SD301から出土した弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の壺・甕・鉢等である。特に上層からは完形の甕が多く出土した。これらは集落を移動する際に投棄された可能性が考えられる。							

上沢遺跡 第55次調査 発掘調査報告書

2009・2・28

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480
印刷 株式会社旭成社
TEL 078-222-5800